

---

# 俺の日常が不思議な事に

凄い腹筋の蛇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の日常が不思議な事に

### 【Nコード】

N7314X

### 【作者名】

凄い腹筋の蛇

### 【あらすじ】

ファンタジーの世界で存分に勇者気分を味わって世界を救い、色々ウンザリした俺は神様に元の世界へ戻してくれと願った。そして戻ってきた現実世界で普通の生活に戻ろうとしたら…なんでチート能力が消えてないの！？ なんでお姫様が転校してきちゃうわけ！？ かけがえの無い日常がファンタジーな奴らにぶち壊される中、俺は神を探し出してぶん殴ってやると心に誓う。いるんだろ？ 見てるんだろ？ 腹抱えて笑ってたんだろ、コンチクショー！

やる気無しの主人公が贈るトホホストーリー。一人称で書く初

めての作品となります。息抜きの書いてますので、更新は不定期です。気が向いたら読んでやって下さい。

男の娘キャラが登場する関係でBLにチェックを入れてますが、そこまでディープになりません。

## 序 おうち帰りたい

ファンタジーという奴はやはり漫画やゲームで楽しむ物であって、実際に体験するもんじゃない。俺は世界を滅ぼそうとしていた魔王とやらを倒し、崩れゆく城を眺めながらそう思った。

神とかいうふざけた奴の口車に乗せられてこのファンタジーな世界にやってきて一年。お決まりのチート能力を武器に暴れまわって世界を救いたいだけ救った。英雄扱いしてもらって人気者になっちゃって、可愛い女の子にはモテまくった。けど…

なんか、疲れた。

あれだけ憧れていたファンタジーは、実は滅茶苦茶ハードな世界だった。目の前で何十人も兵士が魔物に食い殺されるのが日常とか、勘弁して欲しかった。だから、魔王を討伐した褒美をやるうとか神に言われた時、俺は迷わずこつ言ったのよ。

「元の世界に帰してくれ」

もうね、これしか無かった。

普通に学校行って、普通に授業受けて、家に帰ったらゲームしてそんな生活に戻りたかった。周りの奴らには猛反対されたけど、俺の心は揺るがなかった。英雄なんて、ただの便利屋でしかないし。これ以上面倒事を押し付けないでくれ、と。

『本当に良いのか？ あんなに熱望しとったのに。可愛い娘にもモテてたのに』

「いーんです。というか、リアルで青とか緑の髪の毛の女ってちょっと怖いし。怒ったら刃物振り回すとかマジ勘弁」

『ふむ。勿体無いのう…』

勿体無いとか言う問題じゃない。何より心の平穩。敵襲のラツパで起こされるより、親に布団ひっくり返されて起きる方が精神衛生的にもいいだろう。というか起きたら巨大なムカデに絡まられてた事もあったし。あれ、トラウマになったよ。

『分かった、そこまで言うなら元の世界に帰そう。お主のおかげでこの世界は救われた。その恩に報いなければならんからのう』

「サンキュー、助かるよ。ちゃっちやと戻してちょうだい」

泣いてすがりつく自称仲間たち。いやいや、あのね。君らあんまり役に立たない上に余計なトラブル運んで来てくれたよね、たくさん。もう嫌なの。お家に帰りたいただけなの。っーか離せコラ。

何とか取り巻きを振りほどいて、神の作ったゲートに飛び込む俺。感謝されて然るべきなのに夜逃げしてるみたいで悲しい。けど、これで帰れる。サヨナラ、ファンタジー。ただいま、日常。俺は光が世界を包んで行くのを、涙目になりながら眺めていた。

最後に。

「もう俺を変な事に巻き込むなよー！」

神にそう叫びながら、俺は意識を手放した。

気がつくくと、俺は自分の部屋のベッドで寝ていた。時刻は夕方、寝汗でベトベトな所を見ると昼寝でもしていたんだろう。枕元の携帯の液晶には、俺がファンタジーな世界へ飛ばされた日の日付。というか、あれは夢？ そうだよな、夢だよ、夢。やけにリアルで酷い夢だったなあ、これだけ寝汗かくのも無理ないわ。

俺はとりあえずシャワーを浴びる事にした。寝汗と一緒に、嫌な思い出も洗い流そう。そう思って、着替えを持って部屋を出る。階段を降りるとすぐ風呂場へと向かった。

家の風呂場は脱衣所と洗面所が一緒になっている。だから、誰かが風呂に入っていると他の人は洗面台が使えなくなる。が、中には遠慮無く入ってくる奴もいて、マズい事にそれが義妹の紗良ウチだったりする。親父の再婚相手の連れ子で、俺の一つ下の高校一年だ。才色兼備を地で行く女で、やたらと俺をバカにしている。

ガラッ

「邪魔です、兄さ…」

いつものように、乱入して兄を兄とも思わない発言をするかと思いきや。紗良は俺を見て固まった。ん？

「あんだよ。俺の身体見て楽しいか？」

「うっ…いや、そんなワケないです！ 自意識過剰は死んだ方がいいんです！」

ボタンと大きな音を立てて出て行く紗良。顔を真っ赤にしてたが、珍しいな。いつもは鼻で笑って罵倒する所なのに。そう思いながら服を全部脱いでカゴに入れると、俺はなんとなく鏡を見た。そして…

俺も固まった。

「嘘だろ…？」

そんな言葉が思わず口を出るのも仕方ないだろう。

何故ならそこには、あのファンタジー世界で鍛え上げた肉体をもった俺がいたからだ。

細マッチョ。

腹筋モコモコ。

少なくとも、あっちに行く前の俺からは考えられない姿だ。

神が与えたチート能力の一つは、身体能力を部分的に強化する力。けどこれじゃ使い勝手が悪かった。腕力を強化しても、足が遅ければ敵に追いつけない。だから、俺は結局全身の筋力を満遍なくつけるように鍛える事となった。この身体は、明らかにそうして鍛えた後の身体だ。

つまり、あれは夢じゃなかったという事か。

俺は、恐る恐る自分の身体を触る。うん、間違いない。ムキムキです。どうしよう。いや、ムキムキなだけなら問題ないか。むしろ、いいじゃないか。そんな事を考えながらも、俺は嫌な妄想を振り払う事が出来なかった。いや、まさか、ねえ…。

チート能力が残ってるなんて事、無いよねえ？

神から与えられた能力は他に、「空を飛ぶ能力」と「自己修復能力」。わざとケガするのは嫌だから、とりあえず飛んでみるか。俺は試しに浮いてみる。すると。

フワッ…

！？

浮いちゃった。

ふわふわと、脱衣所に裸で浮かぶ俺。慌てて能力を解除すると、俺は床に勢い良くケツを打ちつけた。

ガンッ！

「いてえ!?!」



オーケー、ついでに夢じゃないってのも分かった。どうやら俺は、普通に帰って来たわけじゃないようだ。空が飛べて化け物じみた身体強化と再生能力を持った人間。勘弁してくれとボヤキたくなる。

神よ。

いい加減、怒ってもいいかな。

こんなんバレたら捕まってモルモットにされちまうわっ!!

## 第一話 空気失格

俺の名前は佐藤健司。どこにでもありそうな名前で、実際どこにもある名前だ。外見的にも中肉中背で、ありがちな顔をしている。性格も面倒臭がりで事なかれ主義だから、今まで目立った事なんて一切なし。高校二年の今まで誰かから告白された事なんてないし、そもそも俺を覚えている人間なんて居ないんじゃないか。そんな、空気のような存在が俺、佐藤健司だ。なんか自分で言ってる悲しくなってきた。

俺はリスクを嫌う。その性格をどうにかしたくて、ファンタジー世界に行った時は無駄にはじめてみたが、やはり柄じゃなかったらしい。元の世界に戻ってきてからは元の性格に戻り、実際この性格が心地いいのだ。つまり。

目立つのは嫌だ。

チート能力は隠して行こう。

知られちゃマズいから、使わない。

学校行くのに空なんて飛ぶ必要ないんだ。見つかって見世物にされるリスクを考えれば当たり前の結論。他にも、自己修復能力なんて最悪だ。瀕死の重傷負っておきながら次の日ケロツとしてたら即モルモットだろう。ただ、これはゲームを模倣した能力で一晩寝ないと効果は現れない。寝なきゃいいのだ。ふざけるな。無理だ。

つまり俺は、ケガが出来ない。チート能力をバラすような事は自殺行為。望んでいた普通の日常を送るには、実はチート能力って邪

魔にしかならないという事に気づいた。

それを痛感したのが昨日の夜だ。紗良の疑惑の視線が、ずっと俺に向けられていた。そして、衝撃的な一言が。

「兄さん、左手の人差し指の逆剥けが無くなって。どうやって治したの」

よく見てるな、義妹よ。

覚えてないんだが、どうも俺って向こうに行く前に人差し指逆剥けしてたらしい。それが、完全に治ってるもんだからかなり怪しまれた。しどろもどろに言い訳してみせたが、ジロジロと俺を怪しむ紗良。義母の紗英さんは「あらあら、仲良くなったわねえ」なんて呑気に喜んでた。勘弁してくれ。

そして、今日。

俺はギャルゲーさながらに義妹の朝の襲撃を受ける。一つ違つとすれば。

「死ね、宇宙人！」

「おわっ、あぶね！」

ブウンッ！ バスッ！

金属バットが振り下ろされたりした事だろうか。いや、無茶だろいくらなんでも。

「避けた！？ やっぱり兄さんじゃなかったんだ！ 宇宙人め、兄さんを返せ！」

「どーしてそういう結論に達するんだ！ 一晩考えて出た答えがこれか！？」

とっさにバットを振り上げる紗良の腕をとって、捻りあげる。紗良は思わぬ反撃になすすべなく、ベッドに押し倒された。

「くっ、離せ宇宙人！ 兄さんの格好で私を誘惑するなっ！」

「誘惑なんてしてねーし宇宙人でも無い！ 何で俺が宇宙人なんだよ！」

バタバタ暴れる紗良を組み伏せたまま、俺は尋ねる。どうでもいいが、この体勢ってかなり妖しいよな。

「だって…だって、兄さんがあんなにムキムキなのっておかしいもん！ 去年、家族で初めて海行った時は少しぶよぶよしてたのにな！」

良く見てるなこんにやろ。

確かに腹筋なんて割れるどころかこぼれ落ちそうだったよ。ピザ味のポテチ食い過ぎてたからな。オマケに毎晩カップ麺の豚骨食ってたし。

「あのな、あの時恥ずかしい思いしたから隠れて筋トレしてたんだよ。一年みっちりやればこれくらいなるって」

口からでまかせだ。

「え…」

動きが止まる。何か気づいたのか、表情が変わった。

「じゃあ、兄さんの部屋で夜中ハアハア聞こえてたのは筋トレだったのね？」

うおおい！

聞かれてたよ、何聞いちゃってんのよこの義妹！？ というか夜中に聞き耳立ててるとか怖えよ！

「そ、そうなんだ。俺もさ、鍛えないとなー、と思つてなあ」

あはははは、と乾いた笑い声をあげる俺。紗良は納得したのか身体力を抜いた。そして、顔を赤くする。どうやら、俺の胸元を凝視しているようだ。ん？

「に、兄さん…遅しい…」

いやいや、なにこれ。何雰囲気出してんの。あれ、この娘ってば俺に対する感情マイナス256って感じじゃなかったっけ？

そんな事を考えられていると。

ガチャ

「紗良、健司さん起きた？」

おう、ママン。

なんてタイミングだコンチクショー…

俺の義母、紗英さんは部屋に入ってくるなり俺たちを見て固まった。そりゃそうだ、明らかに自分の娘が組み伏せられてるんだから。それも目えウルウルさせて。どう見てもマズいだろコレ。

「あの、あの、紗英さんコレは…」

「あ、いえ、邪魔したわね!? 二時間くらいで済むかしら!？」

止めるよ阿呆!

おかしいだろそのリアクション! それも二時間とかやけに長いな! 学校より優先する事が、それは!

結局気が動転した紗英さんを落ち着かせたりしてたら二度寝はおろか飯も食えないくらい遅れちまったよチクショー…

俺の通う学校は市立清涼高校という、何だか飲料水に適してそうな名前の高校だったりする。家から自転車で30分、田んぼの真ん中にある長閑な高校だ。周りに遮る物が何も無い為、サボって学校を抜け出そうとするとすぐに見つかる。昔は清涼プリズンなんて呼ばれるくらい荒れた高校だったらしいが、今では県内で中の上くらいのレベルを誇るそれなりにマトモな高校だ。ちなみに紗良は県下トップのなんとか女学院に通っている。奴は半端じゃなく頭がいい

のだ。

家を出てチャリに跨がりペダルを踏み込む。基礎体力の違いって恐ろしい。今までじゃ考えられない勢いで走り出すチャリに、俺は軽い感動を覚えた。

学校までの道のりが、やけに楽しい。坂道上等。いつもの倍以上のスピードで走り抜ける。それで全然疲れないんだから、身体は鍛えるもんだと思う。これだけは、神に感謝しよう。ちよっとだけ。

学校につくと何時もより早い時間だった。俺は食堂近くの自販機でペットボトルのお茶を買ってから教室へ向かう。何時もはこんな余裕ないから、何だか気分がいい。途中、クラスの奴らを見かけたが声なんてかけなかった。向こうも、こちらを気にとめる事はない。これが普通。正常だ。向こうじゃ行く先々で声をかけられ鬱陶しかったからな。

教室に入って、自分の席につく。懐かしいクラスの空気。というか俺が空気。軽く挨拶する程度の奴はいるけど、それだけ。誰にとっても「その他大勢」で括られる程度の存在感でいいのだ。それが、当たり前障りのない日常を送る秘訣。

しかし。

なんだろうな…嫌な予感がする。

ファンタジー世界で鍛えた俺の第六感が、俺に警告を発してやがる。うーん、これはマズいですよ？ 向こうに居た時からこの手の直感は外してないんだよなあ…。

そんな事を考えていると、クラスの連中の話し声が飛び込んで来た。えーと、何々？ 転校生？ うわ、お決まりのパターンかよ。けどここは現実世界、突拍子もない人間がくるなんて事ないだろう。ん？ 外人さん？ いやそれは珍し過ぎる。けど、少し離れた港町じゃ北欧の国と交流あるから無理な展開ではないかな。え、なに、巨大財閥の娘さん？ 無茶だ。それは無茶だ。なんでそんな人がこんな辺鄙な田舎町に来るんだよ！ けど、大人しくしてりや目を付けられたりしないよね？

クラスの皆が賑やかに話しをしている中、俺は一人窓の外を眺めながらブツブツと呟いていた。席が窓側の一番後ろだから、誰も俺のつぶやきには気づかない。きつと端から見たら不気味なんだろうな。

そして、運命の時が。

ガラツと音を立てて教室に入ってくる、我がクラスの担任ブルバばあ。ブルドックに似てるババアだからそう呼ばれているが、そのブルバばあをまるで番犬のように従えて金髪の女の子が現れた。呆然と見つめるクラスメートたち。俺も、開いた口が塞がらない。皆とは違う理由で。

だつて…

嘘だろ？

何で、彼女がここに？

困惑する俺の気持ちを知ってか知らずか、女の子はキョロキョロと教室を見渡す。そして、隠れようとして失敗した俺にしつかりと



目を合わせて…顔を輝かせた。やめろ、やめろ、それだけはやめろ！

しかし、現実は無情だ。

女の子は小走りに俺に駆け寄ってくると、開口一番とんでもない事を言いやがった。

「やっと会えました、勇者様っ！！」

イヤアアアアアアアアアツ！？

## 第二話 クリクリ

ほどよくファンタジックでバイオレンスな異世界で、いわゆる善良な人間の親玉的存在がある。俺が世話になって、それ以上に世話してやった王国、クリスレア。彼女はその国の王女であり、一応回復魔法の使い手だったクリステイアーノ・クリスレア。本当はもっと長いらしいが覚えきれなかった。

愛称はクリクリ。これは、俺がつけた。

金髪ロングヘアに美しいブルーアイズ。溢れんばかりの正義感で数多くの余計な厄介事に俺を巻き込んできた。美しき疫病神クリクリ。そのおかしな神通力はこの世界でも発揮されるらしい。

今、教室は水をうったように静まり返っていた。訝しげに俺を見る皆。俺は嫌な汗を背中いっぱいにかきながら、なんとか上手い言い訳は無いかと頭を働かせる。そして、口について出た言葉は…

「あ、あの、ゲームの話なんだ！ ネットゲでさ、知り合っただよ、うん！」

自爆った。

なんだよそれ。俺、ネットゲなんかやった事ねえよ。

けど、それで何人かの人間は納得したらしい。加えて、その他の人間は「なんだオタクか」と冷たい視線を俺に向けた。くう…、最悪だ。

「ゆ、勇者様？ ネットゲとは何ですか？」

「い、いいから先生の所へ戻れ！ 待たせてんだろ！」

なんとかクリクリの背中を押しして教卓の方へと移動させる。その間、周囲の嫌な視線が俺たちに突き刺さっていた。

そして。

「初めまして。今日から此方でお世話になります、クリスティアーノ・クリスマスレアと申します」

堂々と、王族オーラを出して自己紹介するクリクリ。ああ、現実だ。信じたくないけど、この嘘みたいな神々しさは間違い無くクリクリだ。俺は半分脱力しながらクリクリを眺めていた。

さて。

転校生のデビューには二種類ある。成功するか、失敗するかだ。クリクリのデビューは後者に該当する。

そりゃ、いきなり勇者様発言で俺を巻き込んでオタク認定されちゃそうなるだろう。周囲の人間は、話しかけようにも警戒心が先立って声をかけられないようだ。クリクリも、距離を置かれているの

に気づいて困惑している。席はやはりというか俺の隣で、困ったように俺に尋ねて来た。

「あの、私何かいけない事言いましたか？」

「そうだね。とりあえず俺の事は名前で呼ぶべきだったと思っよ」

「しかしそれでは世界を救った勇者様に失…もごっ!？」

慌てて口を塞ぐ。ああもう、勘弁してくれ！ 見るな見るな、みんな俺を見るな！

「健司だ。ケ・ン・ジ！ オーケー？」

「…ンッ！ンッ！」

首を縦に振るクリクリ。仕方なく手を離れた。しかし…

もう手遅れだな。

俺の空気ライフは終わったよ。一体コイツはなんのつもりでこの世界に来たんだか…。俺は頭を抱えながら、一時間目の授業の用意をした。

クリクリは一日中俺のそばにいた。授業中は勿論、休み時間も話す相手が他に居ないので俺のそばにいるしかないのか、片時もそば

を離れない。まあ俺自身いつも一人だったから相手は出来るんだが、正直言つてウザかった。コイツのせいで、俺の生活が滅茶苦茶になったという思いがあったからだろう。

昼休み、屋上で飯を食ってる時に、俺は意を決してクリクリに尋ねた。

「あのさ、なんでこっちの世界に来たんだよ。やっぱり神の奴に頼んで来たのか？」

「はい。勇…健司様が話していた、魔物の居ない平和な国というのを見てみたかったのです。それに、健司様と健司様の故郷を歩いてみたかったというのもあります」

なんとというか…。

なんでそんな理由で来ちゃうかね。

慕ってくれるのは嬉しいけどさ。それで俺の日常を壊して欲しくは無いワケですよ。

「とりあえずさ。俺はこつちじゃ、なんの能力も無い普通の人間だったんだ。英雄でも勇者でもない、普通の人。そつち行つた時に神から特別な力を貰つて、いい気になって暴れ回っただけだって。立派な人間じゃねーから、今更勇者とか言うのは止めてくれ」

「…健司様……」

しょんぼりしたような顔をする。仕方ねえだろ、それが現実だし。正義感なんて実際これっぽっちも持ち合わせてねえんだよ、俺は。

「でも、私を魔物から助けしてくれましたわ」

「初めてそっちに行つた時か。ありゃたまたま落ちた先にお前を追いかけてた魔物がいただけだ」

「お城が攻め込まれた時、城の裏手で大軍を一人で食い止めてくれました！」

「夜逃げしようとしたら鉢合わせしただけだ。逃げようにも逃げる場所が無かつたから戦つただけだよ」

「魔王を倒して、世界を救ってくれたじゃないですか！」

「魔王倒さなきゃ居場所が無くなるってくらい、全国民でプレッシャーかけ続けてくれたからな！」

「はあ、はあ、流石に怒鳴るのはやり過ぎたか？ クリクリは次第に涙目になってきていた。けど、こればかりは譲れない。」

「お前は俺を買いかぶり過ぎだつて。俺は、そんな偉い人間じゃない」

「……………嘘です、そんなの…。健司様は、嘘つきなんです」

「嘘じゃねえよ。悪いけど、俺は面倒事や厄介事を持ち込んでくるお前が鬱陶しくて苦手だった。正義とかそついうの、こつちじゃ流らんねえから」

そこまで言うと、クリクリはギョツと目をつぶった。涙が一筋、

頬を伝う。そして諦めたかのように微笑むと、俺に謝った。

「…すみません。私、健司様を困らせてたみたいですね。これから  
は、そうした事の無いようにしますから」

そう言つて、食べていた弁当箱を片付けると、目元をハンカチで  
軽く押さえてからクリクリは立ち上がった。そして、綺麗なお辞儀  
を一回して…屋上から去つて行つた。

失望…したんだろうな。

まあ、当たり前か。

けど俺は後悔しない。迷惑だったのは事実なんだから。アイツの  
せいで、何度死にかけた事か。第一、ファンタジーの住人ならファ  
ンタジーの世界に早く帰れよ。俺が現実に戻つたようにさ。そんな  
風に文句を垂れながら、俺は購買で買ったパンを口の中に押し込  
んだ。

相変わらずマズいパンだけど、今日は特別マズいような気がした。

その日。

俺はクリクリとは最低限の会話だけをして、さっさと学校から家

に帰った。いたたまれない気持ちになつていたのもあるけど、クリも女子なんだから女子の友達を作ればいいんだ。これ以上一緒にいて、変な誤解をされても困るだろ。そんな事を考えてたら、これ以上声をかける気になれなかつたんだ。

家に帰ってから、俺は胸の中のモヤモヤを消す為に筋トレをした。向こうで習慣づけていた運動だ。変則的なスクワットや腕立てをしながら、俺は向こうでの事を思い出していた。

最初は傭兵として雇われたつげ。国の危機を救ったとかで騎士に選ばれた時に、なんかヤダって言って牢屋にぶち込まれたのはいい思い出だ。クリクリが王様を説得してくれたんだよな、確か。その後、クリクリ専属のボディガードにされて…

死ぬような思いをたくさんした。けど、悪い思い出ばかりじゃなかったハズだ。

「言い過ぎたかな、やっぱり…」

そう言うってから、俺はブンブンと頭を振った。いやいや、あれでいいんだ。これ以上、目立ちたくは無い。平穩無事な人生が、一番幸せなんだ。俺は自分にそう言い聞かせながら、腕立てに集中した。

紗英さんが夕飯が出来た事を知らせてくれるまで、俺は一心不乱に身体を鍛え続けた。



次の日から、俺は極力クリクリと距離を置くようにした。クリクリも、最低限の会話だけをして俺から離れるようになった。これが、普通。男子と女子は、普段はそんなに話をしないもんなんだ。

クリクリは、やはり皆からハブられていた。こつちの世界じゃ財閥の娘らしいから、やっかみもあつたんだろうな。一人でいるのを良く見かけたし、その顔からは以前の明るさは無くなっていった。

嫌なもんだろ、こつちの世界は。悪い事言わないから、早く帰れよ。俺はクリクリを見かける度にそう思った。

そんな毎日を送り始めて二週間くらいたった頃。

事件は起こった。

その日、おれはまたもや第六感の告げるアラームにウンザリしながら家路につこうとしていた。校舎を出て、自転車置き場にチャリを取りに行った時…何故かは分からないけど、俺はチャリを素通りして奥の焼却炉の方へと足を向けた。焼却炉のそのまた奥には、不良たちの溜まり場がある。こんな学校にも未だに不良という連中はいて、カツアゲやら喫煙やらやっているという話だ。

俺は、嫌な予感を感じながらも焼却炉の奥へと足を運ぶ。すると、

クリクリの声が聞こえてきた。

「健司様が怪我をしたと聞いたから来たんです！ あなたたちに用はありません！」

クリクリの周りを、うちの学校でも特に評判の悪い五人の男子が取り囲んでいた。おいおい、嘘だろう。学校でそんな事、本当にするつもりか？

男子たちは、ただニヤニヤと笑ってクリクリの進路を塞ぐ。運動なんて苦手で喧嘩一つした事無いクリクリは、次第に泣きそうな顔になってくる。そして、次の瞬間。

男の一人が、クリクリのスカートに手をかけた。

「やめろおおおおっ！！！」

反射的に飛び出す俺。くそっ、これだから勇者って嫌いなんだよ！ 誰かがピンチだと、身体が勝手に動いてしまう！ 俺は男とクリクリの間に強引に身体を割り込ませると、クリクリを背中に隠した。

「何してんスカ先輩たち。犯罪じゃないですか！」

男子たちは、三年の商業クラスの間人だった。靴に入ったラインで分かる。向こうも俺の事を知っているのか、嘲るような口調で俺に声をかける。

「お、勇者様じゃないですか」

「さすが勇者様、かつこいいー！」

「で、なんかビームとか出すワケ？ 魔法とか使っちゃおう？」

次々に、俺を馬鹿にする言葉を吐いた。その言葉に反応するのは、クリクリだ。

「健司様を馬鹿にしないで下さい！ あなた達なんか、健司様の敵ではありません！」

ああ、やめてくんねえかな。

そういう言葉が、一番喜ぶんだって、こういう連中は。案の定ゲラゲラ笑う先輩たち。その中の一人が、突然俺の腹に蹴りを入れた。

ドムッ！

「ぐっ…！」

苦痛に俺の顔が歪む。一瞬、吐き気がしたがこらえた。

「健司様！？」

クリクリが心配そうに声をかけるが、俺はそれを片手で制した。

俺に蹴りを入れた先輩は：少し驚いているようだ。思いのほか俺の身体が固かったからだろう。

「やめませんか。今なら、先生にも言わないから…やめましょう、

「こんな事」

この言葉も、少しまぶさかっただかもしれない。いきり立った先輩たちは、クリクリを無視して俺を捕まえると、集団で袋叩きを始めた。

バキッ！ ドカッ！ ドムッ！

「やめてっ！ 健司様、逃げてっ！」

クリクリが何か言ってる。いや、この手の奴らに何言っても通じないって。お前こそ逃げろよ。そんな事を考えていると、目の端でクリクリが先輩の一人に突き飛ばされるのが見えた。俺を助けに入ろうとしたらしい。

くそっ……。こうなったら、もう目立ってもかまわねえや。というか、充分目立ってるし。

俺は、殴るのに夢中になっている先輩たちに向かってニヤリと笑って言った。

「なんか、軽いつスね。本当は弱いんじゃないですか？」

ブチッと、何かが切れた音がしたような気がした。そして、一斉に先輩たちが殴りかかってくる。俺にはそれが、スローモーションのように見えた。

(そうそう、一斉に来い。…ここだ！)

俺は、拳が身体を捉えるコンマ数秒前で身体強化能力を発動する。

「皮膚、硬質化」

途端に俺の皮膚がダイヤモンドよりも固くなった。これをやると、発動中皮膚が固まって動けなくなるのがネックとなるが、鉄でできた剣をはじくくらい平気で出来るようになるのだ。つまり…

バキボキベキバキボキ！

「『ぎやあああああつ！？』『』『』」

おて手グニャグニャの刑。

先輩たちは一様に拳を複雑骨折：いや、もう粉碎骨折？ 絶叫をあげてその場で転げ回った。そして、そんな大声あげるもんだから見回りしていた先生たちもやってくる。

「何やつとるんだ貴様らー！」

俺は尻餅をついて半ベソかいているクリクリのそばまで行くと、その隣にへたり込んで先生たちの到着を待つのだった。

保健室で応急処置をしてもらった俺は、クリクリと共に生徒指導室で事の経緯を説明した。先生たちも、見た目が一番ボロボロな俺

を責めるような言い方はしない。どう見ても被害者は俺。むしろ、どんなに殴られてもやり返さずにいた事を誉めてくれた。

「お前を殴りすぎてアイツら手え壊したらしいからな。どんな石頭してんだお前は」

体育教師の、通称ゴリラライオンが俺の頭をわしわし撫でながら言う。

「しかしこれで100%アイツらに否があると確定したからな。どうする？ アイツら、このままなら停学処分だが退学まで追い込むか？」

そんな事すすめんなよ。どんな教師だ。

「いえ。俺はそこまで求めてないです。こんな傷一晩寝たら治るし、この程度で退学とか可哀想ですから」

嘘は言っていない。実際、一晩寝たら治ってしまうのだ。だけど、ゴリラライオンはそれを強がりを受け取ったようだ。後ろのクリクリを見てニヤついた所を見ると、俺がクリクリに良い所を見せようとしたとでも思っただろう。

「分かった、じゃあこの件はこれでお終いだ。もう帰って構わないぞ、気をつけてな」

「はい」

「ああ、佐藤」

部屋を出ようとした俺に、声をかける。

「お前、結構やるじゃないか。見直したぞ」

「…ありがとうございます」

俺は少し照れながら、クリクリと一緒に指導室を後にした。

夕暮れ時。

俺はクリクリをチャリの後ろに乗せて、土手の道を走っていた。右手には、夕陽を受けてキラキラ輝く川が。殴られ過ぎた顔には少ししみたが、綺麗だったので良しとする。

しばらく無言で走っていると、クリクリが先に口を開いた。

「ごめんなさい…。また、健司様に迷惑かけましたね」

「ん？ ああ…まあ、いいよ。慣れてるから」

どうしてもぶっきらぼうに答えてしまうのは、俺の悪い所だろう。クリクリは少し落ち込んだようだった。

「私、健司様に会いたくて…神様に頼んだんです。魔王を倒した報酬に、一つだけ願いを叶えてくれると言ってくれたので」

ああ、なるほどね。魔王を倒した時、その場にいたメンバー皆の願いを聞いたわけだ。俺一人じゃなかったのか。

「失望させて悪かったな。俺、最低だったろ」

そう言つと、背中にクリクリの髪の毛が擦れる感触がした。首を横に振つたんだろう。

「健司様は、やっぱり勇者様でした。私がピンチの時には、ちゃんと現れて助けてくれましたから。…悪いのは、健司様の都合も考えずに会いに来た私です。たくさん迷惑かけてしまいましたから」  
そう言つてから、一呼吸置く。そして少し悲しい声で言った。

「私、神様にもう一度お願いして向こうに帰ります。もうこれ以上健司様に迷惑かけませんから、安心して下さい」

…あのさ。

毎回、こうなんだよね。

そつだ、思い出したよ。毎回死ぬような目にあつても、結局クリクリの護衛を続けた理由。それは、クリクリがこないじらしい事言うからだ。ダメなんだ俺、こういう言い方されたら。チクシヨウ、これ意図的に言ってるなら大した悪女だぞ？

キツ、とチャリを止める。

「健司…様？」

「クリクリ、ちょっと降りて」



俺が言うと、クリクリは戸惑いながらもチャリから降りた。少し不安そうなのは、俺が怒ったとでも思ったからだろうか。

俺はクリクリの手を引いて、土手を下りる。そして工事用の資材などで物陰になってる所に来ると、手を離れた。ここなら誰も見えないだろう。俺は周囲を確認すると、クリクリと向かいあい…

ザッ…

ひざまづいた。

「け、健司様！？ 何を！？」

「俺、作法とか良く知らねえんだ。結局俺、誰にも忠誠誓った事ねえから…えっと、これで剣を渡すんだっけ？ 剣になるものは…」

ガサガサと鞆をあさる。

「これでいいや」

俺はそう言っつて、折りたたみ傘を取り出した。組み立てて閉じると、剣のように持ってクリクリに捧げる。

「今まで冷たくしてゴメン。これからは、俺が守るから…こっちに居てくんないかな。なんつーか、その、せっかくこっちに来たのにこれでサヨナラとか寂しいし…」

なんつー誓いの言葉だ。馬鹿か俺は。けど、クリクリは俺を馬鹿にするような事は言わなかった。本当に嬉しそうに、ニッコリ笑ってくれたんだ。そして、俺の手から傘を受け取る。その傘をクリクリはゆっくり立てると…

ポソツ!

開いた。え、なんだそりゃ?

不思議そうに見上げる俺。その時、絶妙なタイミングで空からポツポツと雨が降って来た。…嘘だろ? いつの間にか、空は半分くらい雲に覆われていた。クリクリは楽しそうに笑うと、傘の下に俺を入れる。

「守られてばかりじゃ気がひけます。私も、自分に出来る方法で健司様を守りたい。それではいけませんか?」

「クリクリ…」

完全にやられた。

こんな事言われて惚れない男は居ないんじゃないか?

俺は顔を真っ赤にして、「それでいいです」とだけ言った。仕方ないだろ? いざとなったら、気の利いたセリフなんて出てこなかったんだから。



### 第三話 そう来たか

紗良の様子がおかしい。

それはクリクリを彼女の住む高級マンションへ送り届け、自宅へ戻ったその時から始まった。顔に沢山ガーゼを貼り付けて帰ってきた俺を見て、紗良は今まで見せた事の無いような狼狽ぶりを見せた。

「に、に、兄さん！？ 兄さんが死んじゃう！！」

「死ぬわけねーだろ。この程度で死んでたまるか！」

俺の顔を見た途端にコレだもんな。そんなに酷い顔してんのか、俺は。

とりあえず台所へ向かう。夕飯を作ってる紗英さんに挨拶をした  
ら……

ふらっ……

「さ、紗英さん！？ 紗英さーん！！」

気絶しやがった。なんなんだ、俺の顔、もしかしてグロい事になってんのか？ 不安になって、急いで洗面所へと向かう。鏡を見ると、そこには傷だらけの俺の顔が。

あー、なるほどね。

紗良たちがビビるのも無理ないか。俺も久々に見る、見事な青タシがあった。加えて目尻を切ってしまったらしく、大きな血の塊が

かさぶたみたいにくっついていて。確かに見た目怖いかもしれない。

クリクリはヒーラーだけあってこの程度の傷を見ても驚かない。ここらへんに、殺伐とした世界を体験したかどうかの差が出るんだろうな。そんな気がする。ちなみにクリクリが魔法を使って俺を回復しなかったのは、この程度の傷で魔法を使うなと向こうの世界で躡っていたからだ。こんなの、寝れば治るんだから。

さーて、どうしたものと倒れた紗英さんを居間のソファーに寝かせていると、ガラツと玄関のドアが開く音が。ああもう、今日は面倒くさいな！ 親父かよ！ 偶に早く帰ってくるのはいいけどよりにもよって今日か！

「ただいまー…」

のんびりした声で言いながら、親父が居間へとやってくる。横になつた紗英さんと、酷い顔した俺を見て固まった。

「ど、ど、どうしたんだ！？ 強盗か、強盗に襲われたのか!?!」

「いや違うから！ 何取り乱してんだよ!」

「じゃあお前が強盗か!?!」

「落ち着け、親父!?!」

うちの親父はびつくりすると訳わからない事を口にする。そこから辺、血は繋がっていないハズなのに紗良とそっくりだ。当の紗良は、俺のそばで傷を指で突っついていて。地味に痛い。

結局、夕飯は出前を取る事になった。紗英さんが夕飯を作れなくなったから、仕方ない。頼んだのがうな重だったのは俺の傷を見て早く元気になるようにと考えたからだろうか。そうであって欲しい。夜中に親父のハッスルする声が聞こえてきたらなんかヤダからな。

紗良は食事中、ずっと俺の傷を見ていた。

…あの、まだ怪しんでるわけね？ はあ…、面倒くさいなあ。

さて、次の日の朝。

俺は自慢の第六感アラーム、『嫌な予感』によって強制的に目を覚まされた。部屋のドアが微かに音を立てて開かれる。

ヒタ、ヒタ…

俺は薄目を開けて入って来た人物を確認する。それは案の定義妹の紗良だった。

紗良は、ゆっくりと俺の寝ているベッドに近づいて来る。そして、俺のそばまでやって来ると恐る恐る顔を突っついた。

なんだ、怪我の心配してんのか。大丈夫だって、こんな怪我一日寝れば治っちまうんだから……って、治ったらおかしいんだ！ ヤバい、と思って紗良の手を振り払おうとしたが…

べりっ

遅かった。

紗良は、俺の頬に貼られたガーゼを引き剥がす。そして、信じられないような顔をした。

「う…うそ…」

ああ、終わった。最悪だ。紗良がふるふると震えるのが分かる。そして、持っていた金属バツ…って、またか！

「死ね、宇宙人！」

「だからやめろっちゅうに！」

ブウンツ！ バスツ！

枕にめり込む。

俺はすぐさま紗良の腕を捻り上げ、ベッドに組み伏せた。

「は、離せ宇宙人！ 兄さんを返せ馬鹿！」

「だからどうして俺が宇宙人になるんだ！ それといちいちバツト持ってくるな！」

バタバタ暴れる紗良。キツと俺を睨むと悔しそうに言う。

「人間がそんなに早く傷が治るワケない！ やっぱり兄さんは宇宙

人にさらわれて、ここにいるのは宇宙人が化けた偽物なんだ！」

「無茶苦茶言うな！ どころかどう見ても本人だろうが！ 宇宙人って言う方が無理だろ！」

むむむ、と唸る紗良。でもまあ、怪しむのも無理ないか。

「じゃあ、本物の兄さんなら答えられる質問をするわ。本物だと言  
い張るなら、答えてよ」

「ん？ ああ、いいぜ。それでお前が納得するならな」

紗良は俺を探るように睨みつける。そして意を決したように、口を開いた。

「私と兄さんが初めて会ったのは、いつ？」

え？

紗良と初めて会った時？

そりゃ親父が結婚決めてから初顔合わせん時じゃないか？ そう  
言おうとして、俺は紗良の顔を見る。その時、俺の脳裏に一つの光  
景が蘇ってきた。紗良の、この睨みつけるような目。それは以前に  
も見た事があった。確かあれは小さい頃…俺が、ここよりもっと田  
舎に居た頃の事だ。

保育園の砂場で一人、城を作る女の子。皆が親に迎えに来てもら  
ってる中、いつまで経っても迎えが来なくて寂しそうにしていた。  
だから、俺は一旦家に帰った後にもう一度保育園に行って、一緒に



遊んでやっていた。保育園を卒園してから引越したから、それっきりだったが…確かにあの目つきの悪い女の子に似ている。というかソツクリだった。

「白崎の保育園で会ったのが最初だ。俺はお前をさっちゃんと呼んで、お前は俺をけんちゃんって呼んでた」

「……っ!？」

紗良の顔が、驚愕に彩られる。大きく見開かれた瞳に、何かが滲んできた。

「砂の城に木の枝立てて、二人の城だって喜んでたよな。まあ、その後俺が砂山崩しを始めたら泣き出したけど」

我ながら容赦ないと思う。しかし、良く思い出せたもんだ。

紗良は、涙をポロポロ流し始めた。

「兄さん…覚えてくれてたんだ…良かった、本物の兄さんだよ…」

そう言うと、わんわん泣き出した。あー、コイツがずっと俺に突っかかってたり、いちいち構って顔色伺ってたりしてたのはこの事があったからだったのか。俺は手を離すと、紗良を抱き寄せて頭を撫でてやった。しゃーない、今日は特別だ。

「馬鹿、覚えてたんなら早く言ってよう！ 思い出すの、ずっと待ってたんだからね!？」

「悪い、中々言い出せなくてなあ…。お前も、だいぶ綺麗になってたから思い出の中のお前と一致しなかつたんだ」

なんでこんな軽口言えるかな。というか、こんな齒の浮くセリフ言えるならクリクリに言っておけば良かった。家族だから、照れずに言えるのだろうか。

しかし…これは余計な言葉だったかもしれない。

顔を真っ赤にしてその気になっちゃったのか、紗良はとんでもない事を言った。

「…じゃあ、将来結婚してくれるって言ったのは覚えてる？」

は？

いやいやいやいや。

いくらなんでもそれは無い。あの当時の俺は絶対そんな発想はしなかったハズだ。

「どさくさに紛れて嘘言うな。そんな約束したら、絶対覚えてるだろ。こちとら女にモテた事の無い鋼の童貞だぞ」

「言った！ 絶対言った！ お城を作った時言ったもん！ 私がお姫様で、兄さんが王子様って言ったよ！」

なんじゃそら。いや、そんな婚約にやらんだろいくら何でも。

「いいか、その王子様とお姫様ってのは兄妹だ。決して夫婦ではない。同じ王族だというだけだろう」

「~~~~つ!!」

ガバツと身を翻した。ヤバい!

「死ね、女の敵!」

「ちょ、またかよ!?!」

ブウンツ! バスツ!

床に転がってたバットを拾い上げると、またもや俺に向かって振り下ろす紗良。宇宙人から女の敵とか、スケールダウンが激しいなというか、俺の治癒力に関してはもう気にならないんだろうか。迫り来るバットを避けながら、俺はため息をつく。結局今日も、早起きした割には家を出るのが遅くなるのだった。

朝からドタバタしたせい、俺は昨日の事を完全に忘れていつも通り学校へ登校した。だから、最初周囲の人間の態度の変化の理由が分からなかった。

なーんか、ジロジロ見られてる。

決して、冷たくは無い。話しかけたくて、出来ないような。そん

な感じだ。

俺は最初、また顔のガーゼがズレて異様な治癒力がバレたのかと思っただがどうも違うようだ。教室に入る前に、トイレの鏡で確認したから間違いない。

何だろうな？

顔がガーゼだらけでキモいとか？

教室に入ってからそんな調子だったので、俺も何だか居心地が悪かった。そんな中、周囲の空気なぞ全く読めない人物が声をかけてくる。

「おはようございます、健司様！」

「お、おはよう、クリクリ」

クリクリだった。昨日、あの恥ずかしい誓いを立ててから…俺は開き直ってクリクリといつも通り接すると決めていた。だから、周りの視線なんてもう気にしない。

「怪我の方はまだ治らないんですか？ なんなら私のヒールで…」

「わーっ!?!? いやいや、ゲームだったらそれも可能だけど、これ現実だからね？」

前言撤回。そう言えばこっちじゃ魔法なぞ存在しないって教えてなかったな。そこは周りの目を気にしよう。うん。

そんな会話をしていると。

一人のクラスメートが声をかけてきた。俺と偶に話をする男子のくっわだ轡田だ。メガネをかけた、小さくて気弱な、女の子みたいな奴。だからこそ、俺も話が出来たんだが…何だろ？

「あの、佐藤君…その怪我って、昨日喧嘩したっていう怪我？」

「え…？ ああ、喧嘩っていうか一方的に殴られただけなんだけどね。そっか、もう噂になってんのか」

俺が答えると、隣のクリクリが付け加える。

「私が襲われた時に、助けに入ってくれたんです。健司様は自分からは全く手を出さなかったんですけど、あの男たちは全員手が碎けて病院送りになりました」

おーい…

いや間違っちゃいないが、そんな事言ったら変な伝説が出来ちゃうでしょ。

いや、もう遅いか。轡田は「凄いな、佐藤君！」とか言って目を輝かせてるし、他の連中も一斉にひそひそ話を始めるし…ああ、もう何だか面倒くさいな。変な事件に発展しないといいんだけど。

クリクリとの関係が改善されてから、俺の学校生活は今までになく楽しいものとなっていった。それまで目立たないように気をつけて生きてきたが、今となっては何故そんな事をしていたのか分からなくなっているくらいだ。

周りの目なんか気にしないで、自分のペースで生活する。それで嫌われても、俺は一人じゃない。クリクリが居るのだ。それはとても大きかった。

昼休み、いつもは一人で食べる食事も、二人で食べるととても楽しい。それが惚れた相手なら尚更だ。屋上で二人して弁当を食べながら、実感する。俺の分の弁当？ 勿論クリクリが持って来てくれたものだ。

「クリクリ、お前一人暮らしたる？ 弁当って自分で作ってんのか？」

「いえ、メイドのステラも此方にいるんです。毎朝朝食を作りに来てくれて、ついでにお弁当も作ってくれてます」

言っただけから、少し複雑な顔をした。

「神様が無理矢理こちらの世界を作り替えたみたいですね。お父様もお母様も此方に居て、何だか私も最初から此方の人間だったんじゃないかって勘違いしてしまいそうです」

「そりゃあ…強引だな。神ってやつは、何でもアリなんだな」 ウンザリする。クリクリが此方に居るのは今となっては嬉しい事だけど、現実世界に戻って来てまで神の影がチラつくのはちょっと嫌だ

った。

「クリクリ、お前もこっちで暮らすからにはこっちの事勉強しないと。魔法とか、NGだから」

話題を変える。今はここにいない神よりも実生活に関する話をした方がいいだろう。

「はい…。不思議ですね、魔法無しで怪我や病気が治るなんて。健司様がとても強い理由が、分かったような気がします」

いや、それは違うんだが。でも確かに魔法に頼りつきりな世界から此方に来たら戸惑う事も多いだろうな。…今度一緒に、社会勉強もかねて外に遊びに行かないか、とか言って誘ってみようかな。そんな事を考えていると。

ガチャ…

俺たちの背後で、屋上入り口のドアの開く音がした。何だよ、一体。せつかく俺が生まれて初めてデートの誘いをしようつてのに。恨めしい気持ちを抑えながら振り向くと…

やけにガタイのいい男子が、華奢な男子の手を引いて歩いていた。二人は、屋上の俺たちと反対側の端へと歩いて行く。よく見ると、華奢な方は轡田だった。

「あら、あの人は朝話し掛けて来た方ですね。確か、轡田さんでしたか。お昼ご飯でしょうか？」

「いや…昼休みは後10分しかないし、なんか雰囲気変だろ」

何か思いつめた表情の男に、不安げな轡田。どうも様子がおかしい。気になった俺とクリクリは、二人の話を盗み聞きする事にした。俺は身体能力強化で聴覚を強化する。クリクリは風の精霊を召喚して放ち、精霊と聴覚を共有した。はつきり言おう、俺もクリクリも力の使い方としては最悪だ。

徐々に、二人の会話が聞こえてくる。どうやら、ガタイのいい男の方が轡田に何か話し掛けていているようだ。内容は…

「俺、本気なんだよ！ 本気で、お前に惚れてんだよ！」

( ( ! ? ) )

俺とクリクリが同時に固まる。おい、マジか！

「ぼ、僕は普通に女の子が好きなんだ！ そっちの趣味は無いよ！」

「嘘だ！ お前、佐藤と話してる時は他の奴と話してる時と全然違うじゃないか！ 惚れてんだろ！」

「ち、違うよ！ 彼は話しやすいから…」

( ( …… ) )

この沈黙は同時だが、内容は違う。クリクリの沈黙はジト目とともに俺に向けられている。俺の沈黙は…分かるだろ？ また面倒事かよ、とうなだれていたんだ。神よ、実はこれもお前の考えたシナリオじゃないか？ こっちに帰って来てからも、向こう以上に面倒事ばかりじゃないか。



しかし、神を呪った所で事態は好転するワケでもなく。それどころかとんでもない転がり方をしやがった。

「分かった、そんなに佐藤が良いなら俺がアイツ以上の男だと証明してやる！ 喧嘩で先輩を病院送りにした強さに惚れてんだろ？ だったら、俺がアイツに勝ったら俺に惚れるよな！？」

「どうしてそうなるんだよ！ やめて、彼は関係ないでしょ！」

ジーザス。

なんてこった。

本格的に厄払いした方がいいかな。俺は聴覚強化を解除すると、ガツクリとうなだれるのだった。

## 第四話 決闘ですよ

えへ、果たし状もらっちゃった

…ごめん、取り乱した。

昼休み、衝撃的なシーンを目の当たりにした俺たちが教室に戻る  
と、俺の机の上に一枚の紙切れが。そこにはへたくソな字でこう書  
いてあった。

『界たし上 本日、放界後校社うらにて持つ 異常に勝負されたし  
二年A組普通科進学コース110232坂下巖夫』

……。

まあ、伝えたい事は分かる。多分、真面目な奴でもあるんだろう。  
でも、見ての通りとつてもお馬鹿だった。これで進学コースとか悪  
い冗談としか思えない。

「健司様。これは、日本語ですよ？ 私の言語スキルを持ってし  
ても読解不可能なのですが…」

うん。それはそうだろうけど、君の発言も知らない人が聞いたら  
オタクっぽく聞こえるから気をつけてね。

それはともかく。

生徒番号とかまで書きちゃっていいのかね。これ、このまま先生  
に突き出せばおしまいじゃないか。

「ブルばばあかゴリライオンに渡しちゃおうかな」

「え、勝負されないんですか、健司様？」

クリクリが驚くのは、理由がある。俺は向こうに行つた時にチート能力振りかざして色んなバトルマニア達を叩き伏せて来た。そうやって力を誇示していい気になっていた時期を知っているだけに、今のリアクションに驚いたんだろう。

「あのね。日本じゃ決闘は法律で禁止されてんの。こんなの書いて渡した時点でアウトなんだよね」

「そうなんですか…」

そこまで言つて、クリクリが俺に耳打ちをしてくる。

（でも、それであの無茶苦茶な人が納得して引き下がるでしょうか）

（まあ、無理だろうね）

第一。

さつきから周りの奴らの視線が鬱陶しい。皆、決闘を期待しているような顔だ。田舎に娯楽が少ないからつてお前ら…。

「とりあえず、付き合つてやるよ。また殴られて病院送りにでもするわ」

我ながらよく分からない戦い方だ。クリクリは何か言いたげな顔をしたが、言葉を飲み込んだ。多分、殴られる姿を見たくないんだ

ろう。加えて、決して手を出さない俺を理解しかねているのかも  
れない。

ごめんな、クリクリ。これがこっちの世界の戦い方なんだ。直接  
やり合うより社会的な制裁の方がキツいんだよ…って、言っても理  
解されないだろう。

そんな事を考えていると、ふと前の方から視線を感じた。それは  
轡田の申し訳なさそうな視線。ああ、言い出せないよな。もし言っ  
たらホモに狙われてると公言する事になるし、そうなるならぬ噂  
が立てられる事になる。轡田は俺と同じで、周囲のパワーバランス  
に気をつけながら生活してきた小心者だ。アイツの気持ちは、よく  
わかる。

まあ、お前は遠くで見えてくれ。俺はそう心の中でつぶやきな  
がら、次の授業の準備を始めた。

でもって放課後。

掃除もホームルームも終わり、後は帰るか部活に行くか。普通の  
生徒ならそんな選択肢なんだろうが、俺は一択。ホモと対決だ。な  
んてこった。

クリクリは今回、ギャラリーとして俺の決闘を遠くから見守る事になった。俺が決闘するのは学年中に広まっちゃってるから野次馬が多いんだよね。現に今、校舎裏に来ているんだが二、三十人もの野次馬が集まっている。昨日の不良病院送りもあって、関心が高まっているだろうな。

俺が到着してから10分後。

言い出しっぺの馬鹿が、慌ててやってきた。

「に、逃げなかったようだな、佐藤健司！」

「おせーよ。なにしてんだよ」

「うるさい、提出物出すの忘れて先生に怒られてただけだ！」

なんだそりゃ。気の毒すぎるくらい馬鹿だな。俺が呆れていると、その態度にムカついたのか馬鹿は大声で俺に啖呵を切った。

「上級生倒していい気になってんのかも知らねえけど、今日までだからな！ お前より俺の方が強いって、証明してやる！」

「はあ」

どっちが強いとか、どうでもいいだろ。

「お前の方が強いって事でいいよ。帰っていいかな、俺」

「ふざけるな！」

なんだよもつ…

「ムカつくんだよ、その態度が！ お前が調子くれてるから、勘違いしてお前に惚れる奴が出てくるんだ！」

そう言うのと、馬鹿は俺に向かって拳を振り上げる。俺は避けもせず、それを顔面に食らった。

バキッ！

「……………」

痛いよ。強化しなかったからな。まあ、これで先に手を出したのはこの馬鹿だって事になった。こういうのはね、ちゃんとしておかないと。まあ、また頬腫れちゃったけど。仕方ない。

さあて、どうやって壊してやろうかな。俺がそんな事を考えていると、意外な人物がそこに飛び込んできた。クリクリ？ いや違う。アイツなら人垣の中で辛そうな顔で俺を見ている。

飛び込んできたのは、轡田だった。

「やめてよ！ 何でこんな事するんだよ！」

「ヒ、ヒロ！ お前、コイツを庇うのかよ！」

ヒロ？ ああ、轡田ってヒロなんかかって名前なのか。まだ一学期でクラス一緒になったばかりだから知らなかった。で、何の茶番が始まるんだ？

「これって、僕が原因なんだから！ だったら、僕を殴ればいい！」

「なっ…ヒロ、なんでそんな事言っただ！好きな奴を殴れるわけないだろ！」

「うわー…」

「ギャラリーがざわつく。」

「凄いな、こんだけの人数の中でカミングアウトとか。というか、この展開は俺までそっち系と思われないか？」

「嫌だっけ言っただでしょ！第一、関係ない人を巻き込むような人なんて、好きになるわけない！」

「うん、正論だ。けどまず、ノンケである事を主張して欲しかった。ほら、知らない人は完全に俺までそっち系だと思って変な視線向けてるし！」

「関係ない！？お前がソイツにはかりいい顔するから悪いんだろ！やめて欲しかったら俺にも優しくしろよ！」

「だから、僕にその気は無いんだ！ハッキリ言っよ、僕は絶対君を好きになんかならない！」

「そこは男を好きにならないって言うてくんねえかな。まあ、もう遅いか。」

「公衆の面前で思いつき振り振られた馬鹿は、俯いてプルプルと震え始めた。…うーん、こりゃヤバいかな？俺は、そろそろ引っ込め

と轡田に声をかけようとして…

馬鹿がズボンのポケットから出した物に気づいた。

「ふざけんな…ふざけんなふざけんなふざけんなあ！」

「どけ轡田あ！」

反射的に轡田を突き飛ばす。クソ、勝手に身体が動きやがる、これだから勇者つてやつは！俺は迫り来る馬鹿の右手に握られた光を紙一重で避けると、すぐさま腕をとって関節技を決めた。クリスレア王国の近衛兵士長に教わった捕縛術だ。まさかこんな場所で使う事になるとは思わなかった。

「ぐあつ！？くそつ！離せ、離せえつ！」

「うるせえ奴だな、これ以上恥の上塗りするつもりか！」

馬鹿は俺に抑えられてるのが信じられないのか、必死にもがいて脱出しようとしていた。そりゃそうか、俺は身長173cm、この馬鹿は180軽く越えている。オマケに横幅もがっしりしてて体重は俺の倍ありそうだ。簡単に吹っ飛ばせると思うだろうな。馬鹿は空いてる方の拳で俺を何度も殴るが、俺はビクともしなかった。

まあ、無理だ。

足をかけてすっ転ばせると、地面にうつ伏せに倒してしっかりホールドする。手に持っていたナイフらしき物が地面に転がった。言ってみりゃ本物の軍人に教え込まれた捕縛術、まず抜けられるワケがない。俺は完全に関節をガッチリキメると、クリクリに目で合図



した。クリクリは頷くと、職員室へと走って行く。

ゴリライオンが到着するまで、俺はもがき続ける馬鹿の動きを封じていた。

「昨日の今日で、また喧嘩騒ぎか。お前は大人しい奴だと思ってたんだがなあ」

ゴリライオンが、半ば呆れながらつぶやいた。ここは昨日と同じ生徒指導室。今回はクリクリの代わりに轡田がいる。

「放課後に呼び出されて、いきなり殴られたんです。で、止めに入った轡田が切られそうになったんで組み伏せたんですけど…まずかったスかね」

「…いや、周りにいた奴らからもある程度事情は聞いているからいいんだが…。その喧嘩理由が、また変な噂になっていてな」

ポリポリ、と頭を搔いて難しい顔をするゴリライオン。まあ、教師としては見過ごせないわな。理由が不純同性交遊とか、男同士の痴情のもつれとか俺も嫌だもん。

「先生。昨日女助けて今日男に走るとか変でしょ。大丈夫、俺にそのケは無いですただ巻き込まれただけです！」

「ああ。それが聞いて安心した」

疑ってたんかい。

俺が無然としていると、轡田がゴリライオンに話しかけた。

「あの…僕、ずっと坂下君に言い寄られて困ってたんですけど、怖くて誰にも相談出来なかつたんです。坂下君は、どうなるんですか？　すぐまた戻って来るんですか？」

恐る恐る尋ねる轡田。ああ、そうか。下手に拒絶して苛められるのが怖かったのか。

「あー…まだアイツの言い分を聞いてないからハツキリ言えんが、危険物持ち込んで人に向けた時点で基本的に退学だ。よほど反省してるなら停学で済むかもしらんが、まあ無いだろう」

ホッと胸を撫で下ろす轡田。ゴリライオンは視線を俺に向けた。

「で、どうする？　今回も殴られた上にナイフで切られかけた。刑事事件にするか？」

だからすすめんなよ。学校の評価も下がるだろ？

「面倒なのは嫌です。全部、先生に任せますよ。俺は坂下とかいう奴がこれ以上俺たちに関わって来なければそれでいいですから」

これが本音だ。もう関わってくるな、と。平穩無事に過ごせたらいいんだから。それが一番。ゴリライオンは「佐藤は優し過ぎるな、

将来馬鹿を見るぞ」と言いながら笑っていた。

指導室を轡田と一緒に後にする。轡田はすぐに、俺に謝罪の言葉を述べた。

「ごめんね、佐藤君。僕のせいで怪我をして、周りからも変な目で見られちゃったみたいだ」

「んー…まあ、仕方ないだろ。悪いのは坂下って奴で、お前じゃない」

「でも…」

納得いかないのか、口の中でもごもご言っている。ああもつ、面倒くせえな。

「いいんだよ、終わった事は！それに、お前は俺の前に飛び出して庇ってくれたろ？ おあいこだ、おあいこ」

俺は轡田に向き合って言った。

「逆らうのが怖い相手の前に飛び出すって、半端なく勇気があるだろ。そんだけしてくれたら、俺としてはそれで充分だ」

「佐藤君…」

俺の言葉に、轡田が瞳を潤ませる。…ん？

「佐藤君、本当にありがとう。僕が勇気を出せたのは、佐藤君が頑張ってるのを見てたからなんだ」

そうですか。いや、なんで頬を赤らめる。

「僕、決めたんだ。これからは佐藤君みたいに強くなるって。佐藤君みたいに、誰かを守るくらい強く」

いやそんな事俺に言われても。というか近いよ。怖いよ。

「佐藤君…僕、君のそばに居ていいかな。佐藤君と一緒になら、頑張れそうな気がするんだ」

う…

う…

うわあああああつ!?

なんでなんでなんで!?! お前ノーマルなんだろ? 普通に女の子が好きなんだろ? どーしてそう言う言い方するかな!?

嫌な汗を背中にかきながら、俺は妙に瞳をキラキラさせてる轡田に何て返事をしていいか迷う。くそっ、純粋な好意が怖い! なんだ、この小動物は!?

悩み抜いた末、俺は…

「まあ、別にいいけどよ…」

と、返してしまった。

それと同時に、ピシッと何か音が立てる。それはまるで、凍りついた空気にヒビが入ったかのような…

振り向くと、そこにはクリクリがいた。

「け、健司、様…」

「い、いやいや、これは違うから！　そういうんじゃないから！」

「私、私、健司様がそういう趣味だったなんて…」

最悪だ！　一番誤解して欲しくない人に誤解された！　つーか、轡田も否定しろよ！　なに可愛い顔して戸惑ってんだ！

「信じてたのにー！ーっ！ー！」

「待ってくれクリクリー！ーっ！ー！」

「あ、ちょっと、佐藤君ー！ー！？」

ダダダダ、と走り出すクリクリ、追いかける俺：それを追いかける轡田という、訳の分からない追いかけてこが始まる。ああ、勘弁して欲しい！　結局今日もドタバタ続きじゃないか！　そんな事を考えながら、俺は心の中で涙を流すのだった。

だから。

夕焼けに染まる校舎の屋上から、その追いかけてつこを眺めながら  
ほくそ笑んでいるかつての仲間がいたただなんて。

その時の俺は気づきもしなかった。

## 第五話 新しい俺

どうも、現実世界に戻ってきてても生傷の耐えない佐藤健司です。なんか、もう勘弁してほしい、そんな泣き言を寝言で言っちゃうくらい疲れきってます。はい。

昨日はクリクリの誤解を解いて轡田に節度ある行動をとってくれと頼み込んでたら日が暮れていた。家に帰ったら帰ったで紗良や紗英さんが俺の顔見て大騒ぎするし、気の休まる時が無い。あれほど恋しかったテレビゲームなんてやる気が起きず、夕飯食って風呂入ったら、後はすぐ寝てしまった。

紗良はどうしてたかって？

相変わらず俺をジロジロ観察してたよ。今度はどんな難癖つけてくるか分からないけどさ、そろそろいい加減にして欲しい所だ。過去の思い出をぶち壊してしまったのは悪いとは思うけど、いつまでも思い出に浸ってないで前向いて生きて行かないとな。

…そんな事を考えながら寝たからだろうか。

俺は夢の中で子供に戻って、紗良と一緒にあの砂場で遊んでいた。

俺は紗良が大好きだった。

俺は紗良を愛していた。

将来結婚したいと思っていたし、そう約束をした。

一緒にお城で暮らすのが夢………つて、オイ！　なんだ、なんでこんな事考え始めた！？

ハッと目を覚ます。すると、真つ暗な部屋の中、紗良がベッドのすぐそばでしゃがみ込み、メガホンを俺の耳に当てて…

「俺は紗良を愛していた、俺は紗良を愛していた、俺は紗良を愛して…」

「くおらあつ！ー！」

ガバツと跳ね起きる。なんて奴だ、洗脳作戦で来やがった！

「お前、これはやり過ぎだろ！？」

「だって、だって嫌なんだもん！　兄さんは私のものなんだもん！」

「勝手に所有権主張するんじゃない！　潔く諦める！」

ぐぬぬぬぬ、と紗良が涙目で震える。ヤバイ！

「兄さん殺して私も死ぬーっ！」

「そんな潔さはいらねえええ！」

ブウンツ！　バスツ！

また金属バットが枕にめり込む。その内この枕壊れるんじゃないかな。



昨日よりも更に早起きとなった俺は、暴れる紗良が疲れきって眠るまで、ガツチリ動けないように抱きしめていた。最初は思いつきり暴れていたが、すぐに俺の胸に顔をすり寄せて眠りにつく紗良。くそっ、なんだこの安心しきった寝顔は。結局コイツこれが狙いだっただんじやないか？ スヤスヤと俺の腕の中で眠る紗良を忌々しく眺めていると、カーテンの隙間から差し込んで来る朝の光。あーあ、二度寝は無理か…。俺は生欠伸を噛み締めながらベッドを出るのだった。

朝。学校に登校すると、昨日とはまた違った空気が教室に流れていた。まあオタク趣味に加えてホモ疑惑だ。腫れ物扱いしてくるだろうとは予測していたので何とも思わないが…

「佐藤君、おはよう」

「え？…ああ、おはよう」

意外な事に、挨拶された。クリクリでも轡田でもない、今まで挨拶を交わした事のないクラスメイトに。それは一人だけじゃなくて二人、三人と続いた。

勿論、全員がいきなり態度を変えたわけじゃない。そんな漫画みたいな変化は普通無いだろう。ただ、間違いなく俺に対して普通に挨拶してくれる人が出てきた。

なんか…嬉しいな。

挨拶って、こんなに気分良くなるものだったんだ。以前はおはようなんて言う相手、家族以外で居なかつたから…なんだか新鮮だった。

今度は、こっちから挨拶してみようかな。そんな事を考えていた。

さて…問題のホモ疑惑だけど。

「佐藤君、おはよう」

教室に入ってくるなり、可憐な花のような笑顔で挨拶をしてくる轡田。ざわめくクラスメート。噂は既に広まっているようだ。どういうわけか、女子を中心にキラキラとした目をして此方を見てくる奴が多い。お前ら変態だな？

「ねえ、昨日の怪我は大丈夫？ いっぱい殴られてたでしょ？」

「え？ ああ、あの程度なんでもねえよ。一晩寝りゃ治るから」

「凄いなあ、佐藤君。あいつ、ボクシングジムに通ってるのに」

なに？

「なんか、プロの人をノックアウトした事あるんだって。そんなやつパンチが効かないんだから、佐藤君て凄く強いんだね！」

なんてこつた…

ああ、また皆ひそひそ話しだした。わけわからん武勇伝が作られて行く…。そのうち噂を聞きつけた県内の不良が、次々と戦いを挑んでくる安っぽい不良漫画みたいな展開にならないだろうな？俺は、今から不安だった。

そんな事を考えながら轡田と話をしていると、いつもより少し遅れてクリクリが登校してきた。珍しいな、クリクリが朝遅いなんて

「おはようクリクリ。寝不足か？なんか疲れてるみたいだけど」

「あ、おはようございます健司様、轡田君。申し訳ありません、お見苦しい顔をお見せして…」

クリクリの顔で見苦しかったら世界中の女の顔はグロ映像じゃないか。流石にクラスの女子がいる中でそれを言う勇氣はなかったが、心の中でつぶやいていた。

「実は、以前健司様に言われた通り此方の社会の事を勉強していたのです。それに夢中になっていたら、夜更かしてしまいました…」

なんてこつた、俺のせいだよ！

「悪い、そこまでしなくていいんだ。分からないことがあったら、俺が教えてやるから」

「そうだよ、僕も教えられる事があつたらお手伝いするよ」

轡田も心配そうに言う。ああ、コイツに下心は無い。100%親切で言っている。それは分かるんだが、何となく邪魔に思っ

まう俺はきつと性格悪いんだろっな。

クリクリは疲れた表情を笑顔で隠して、「ありがとうございます」と返した。

体調の悪いクリクリをフォローしながら、以前と少し変わった俺の学校生活はスタートした。正直言うと最初はクリクリの事ばかり気になって周りの変化に気づいていなかったんだが、後々考えてみると周りの俺に対する接し方は随分変わっていた。

まず、俺に声をかけてくれるようになった。

授業で一番イヤなのは、班やグループを作って作業する時だ。俺は自分から声をかけないから、大体最後の方まで残ってしまう。だから同じような気質の轡田と組む事が多かったんだが、今では轡田、クリクリの二人に加えて他にも数人声をかけてくれるようになった。調理実習や科学の実験の時なんかは5、6人でグループを作る必要があるから、だいぶ助かった。

次に、休み時間。授業で同じグループになった連中が話しかけてくれるようになって、クリクリにも女子の友達が出来た。俺や轡田にも話が出来る奴が増えて、前よりも休み時間が楽しくなっていた。週刊誌の回し読みの輪に入れて貰えたり、そんな何でもない事が嬉

しかった。

そして、最後に。  
俺を凄いと行ってくれた。

それは体育の時間だった。現実世界に戻ってきて初めての体育。男子は幅跳び、女子はハードルの授業をしていた。グラウンドに出てクリクリの体操服姿に見とれたりしていると、担当のゴリライオンが俺を呼び出した。

「佐藤、まずお前が見本を見せてみる」

「お、俺ですか!？」

帰宅部の俺が見本？ こういうのって陸上部とかの役目じゃないの？ 疑問に思いつつ位置に着くと、俺は得意の「頑張ってるフリ」をした。

頑張ってるフリ。それは表向き必死な顔をして、だいたい平均的な数字を出すように力を調整する技。波風たてず目立たないようにする必須テクニクだ。しかし…

力の調整を間違えたらしい。

ザツと砂に着地した瞬間、クラスの連中は「おおっ!？」と声を上げた。あちゃ、失敗したか！俺が先生の顔を見ると…

「5メートル30、か。陸上部じゃないのに良く飛んだな」

どうもその数字は、陸上部なら出せるけど帰宅部には難しい数値

らしい。出る杭は打たれる、というのを警戒していた俺だが、皆はそんな俺を凄いと喜んでくれた。

きっかけは確かにファンタジーだが、身体を鍛え上げたのは俺自身の努力。それが皆に誉められて、俺はなんだか涙が出るくらい嬉しかった。

まあ、もつとも。

「帰宅部の佐藤がこれくらい飛べるんだから、お前ら皆5メートルが最低ラインな。これ以下だった奴は腕立て腹筋二十ずつだ」

「『『『『ええええええっ!?!』『』『』」

ゴリラライオンによって恨み言に変わるんだけど。

俺は別に皆に好かれようと態度を変えた訳ではなかった。むしろ逆で、皆にどう思われてもいいやと思って周りに気を使わないようになっていた。だいたい、女の子をクリクリとか変なアダ名で呼ぶなんて、こつちではした事が無い。言葉使いも乱暴になつたし、無表情を装う事もなくなつた。

でも何故か、今の俺の方が周りの受けが良い。分からないもんだな。

そして、おそらく皆が態度を変えた一番の事件が、この体育の時間に起こった。皆、腕立てやスクワットを文句たれながらこなしていた時。俺は一人幅跳びの砂をならしながら、女子のハードルを眺めていた。

見ているのは勿論クリクリ。ブルマ姿のクリクリ、最高。もう女神だね。

向こうにいた頃は豪華なドレスや魔法のかけられたゴツイロープばかりで太ももなんて見た事なかった。言わば激レアなのだ、クリクリの太ももは。

すぐそばで轡田が官能的な喘ぎ声をあげて腕立てしてようがお構いなしに、俺はクリクリを眺めていた。すると…

フラッ…

パタッ

「クリクリ!?!」

ハードル走行の途中で、クリクリが倒れた。女子たちは悲鳴をあげ戸惑う。最悪だ、アイツ無理しないで見学しときゃ良かったのに。女子の担当の先生は、ちょうど他に体調崩した生徒がいたらしく保健室に行つてて、ここには居ない。

「先生、あの…」俺が必死の形相でゴリライオンに声をかけると、ゴリライオンは頷いて言った。

「この授業ではお前が保険委員だ。行ってこい」

「はいっ！」

俺は全力でダッシュした。女子たちはどうして良いか分からずオロオロするばかり。そんな奴らを押しつけてクリクリに駆け寄ると、すぐさまお姫様抱っこで抱え上げる。そして身体に負担をかけないように気をつけながらも、可能な限り速く保健室まで疾走した。

身体強化は使ってなかったと思う。けど、多分普通の人では出せないスピードだったんじゃないかな。後々ゴリライオンに、「陸上部に入れ」としつこく誘われる事になるくらいだから。

保健室には保健医と女子担当の先生、そして貧血を起こしてたクラスの女子がいた。俺は先生に事情を説明して、クリクリをベッドに寝かせる。保健医の話じゃ寝不足と過労らしい。

「クリクリ。夜更かしって、何時まで起きてたんだ？」

「あの…4時、くらいです……」

なにしてんだよ、クリクリ…



「すみません……。こつちの事、はやく覚えなきゃって。健司様に迷惑かけないように、此方の常識を身に付けなきゃって……」

クリクリ、悪かった。俺が悪かったよ……

「4時くらいまで、テレビを見てたんです」

「お前が悪いわ！」

なんじゃそら。聞いてた先生たちもずっこけた。

「あの、日本って凄いですね。掃除機やジェット噴射のノズルとか、凄い便利な物があんなに安くて……」

「よりもよって通販か！ 夜中の通販見て寝不足とか聞いた事ねえよ！」

思わず大きな声を出してしまっただが、仕方ないだろ？ 俺は思いっきり脱力しながら、保健室を後にする。出て行く時、「今度、俺がちやんと教えるから夜はしっかり寝てくれ」と言っと、クリクリは嬉しそうに「はいっ」と言っって幸せそうな顔をした。

まったく。

あんな顔されちゃ、怒るに怒れないよな。

そんな、よくわからない出来事があった日の夕方。後はもう帰るだけ、今日もクリクリと一緒に帰ろうかなと席を立った次の瞬間、スピーカーから生徒の呼び出しが流れてきた。

『2 - B 佐藤健司君、2 - B 佐藤健司君。至急、生徒会室まで来て下さい。繰り返します、2 - B 佐藤健司君…』

クラスの注目が、俺に注がれる。なんなんだよ、一体。今日はそんなに激しいトラブルも無く1日を終えられると思ったのに！

「悪い、クリクリ。呼び出されたから先に帰ってもらえる？ 多分、昨日の喧嘩の事だと思う」

「あ…、待ってちゃダメですか？」

嬉しいけど、体調悪いのに無理すんなど。

「今日は早く帰ってしっかり寝てくれ。メイドさんに頼んで、車で迎えに来て貰えばいい。俺の事を気にかけてくれるなら、まず早く元気になって安心させてくれ。いいな？」

「あ…はい…」

恥ずかしいセリフだが、今日はちゃんと言えたぞ。周りに人がいても構わん。クラスの生暖かい視線を受けながら、俺はクリクリに手を振ってから教室を後にした。

この時クリクリを帰した俺の判断は、非常に正しかった。何故な  
ら...

本日最大のトラブルは、まさに生徒会室で待っていたからだ。

## 第六話 鉄の塊

生徒会と言えば、ギャルゲーなんかじゃお堅いメガネの女の子や、ククリみたいなお嬢様の存在が仕切っている印象があるけど、実際の所秀才タイプの人間が集まるいけ好かない場所というのが現実だ。中には普通の奴のいる生徒会もあるんだろが、ウチは違う。なんせ、去年の生徒会の選挙なんて凄かった。

『清涼プリズンを思い出せ』

こんなスローガンを掲げて、不良撲滅をうたった候補者が当選したからな。今の三年はギリギリ清涼プリズン時代を覚えているらしく、とにかく校内の不正を正す事に命をかけるような連中だった。頭が良くて、底辺を見下すタイプの秀才の集まり。それが俺の抱いている生徒会の印象だった。

そんな生徒会からの呼び出し。もう昨日の事以外考えられないだろう。その前の先輩たちにボコられた件は単なる被害者だったけど、昨日のは私闘みたいなもんだ。多分呼び出されるとは思っていた。

コンコン…

生徒会室の扉を叩く。中から女性の声で「入りなさい」と言う声がした。最悪だ、一番気の強い風間先輩じゃないか！

失礼します、と言って部屋に入ると、そこには案の定風間先輩。後ろで一つに纏めた長い黒髪と鋭い目つきが印象的な生徒会副会長がそこにいた。他には誰もいない。おかしいな、いつも二、三人で活動しているらしいのに。

「ここに呼び出された理由、分かりますか？」

「あの…昨日の喧嘩の件ですか？ それならゴリライ…いや、原田先生と話をつけたハズなんですけど…」

そう言うと、風間先輩はフフン、と鼻で笑った。なんかムカつく。

「確かに、その件なら原田先生に伺ってるわ。穏便に処理をしようとやってたし、それはもう終わった話よ。今日呼び出した理由は、別の話」

え、別？ 何だろう？

「すみません、そうなるで見当もつかなくて…」

「あら、本当に？ 目を閉じて、胸に手を当てて考えてご覧なさい。きつと、思い当たる事があるハズよ」

なんだよ一体。仕方ないので言われた通りにしてみる。目を閉じて、胸に手を当てた。うーん、俺、生徒会に呼ばれる理由なんてあったかなあ。しばらく考えていると…

ツカツカ、と固い音が。風間先輩の革靴の音だ。それは次第に俺に近づいてくる。そして、前方で止まると何かカチャツという音が。膨らみだす…魔力!?

ブウンッ!!

「おわっ!?!」

俺はとっさに身を沈める。目を見開いて確認すると、先輩の手には巨大な剣が握られていた。そんな、嘘だろ！？

「魔剣ヴェンジェンス！？ 鉄丸の持ってた武器じゃねえか！ なんて先輩が！？」

「ふふふ、分からない？」

分かるわけねえ！ 鉄丸ってのは、向こうで一緒に戦った仲間一人だ。全身を無数の武器防具で固めた重戦車みたいな奴で、あんまり沢山の装備で固めるから話し声さえ聞こえないっていう変な奴だった。ゴロゴロ転がって敵陣突っ込んで行く姿は漢って感じだったが…

「分かんねーよ、なんで先輩がアイツの武器を！？ そもそもなんで先輩がそんなデカイ剣振り回せるんだよ…」

華奢な腕で振り回せる代物じゃない。俺でさえ、持つのがやっとだったんだ。腕力強化したら振り回せるけど…

「鈍い奴ね。じゃあ、これでどうよ！」

今度は、もう片方の手に巨大な手甲が。禍々しいオーラを放つそれは、同じく邪悪な加護を受けた魔装、破滅の籠手。毒を含んだ爪のついた危ない武器だ。それも、鉄丸の装備だった。

「な、なんで！？ 先輩、鉄丸をどうしたんだ！ どうやってアイツから装備を奪ったんだ！？」

「まだ分かんないの!?　じゃあ、これは!」

先輩の身体が、巨大な鎧に包まれる。ああっ、そんな!　それは鉄丸の愛用していた邪神王の甲冑!　もしかしてアイツ、騎士をやめたのか!?　金に困って売ったとか!

「どうしてそうなるの!　じゃあ、これ!」

それは滅亡の盾!?　まさか形見分けしてもらったのか!?

「ああもつつ、じゃあコレ!」

くそ、悪魔の脛当てまで!　身ぐるみはがされたのかよ、可哀想だろ先輩!

「うああああ、もぐもぐもぐもぐーっ!」

ぎゃー、殺戮の鉄仮面までー!ー!っ!?

…っつて、おいおい。

目の前の鉄の塊はどこからどう見ても…

「あの…もしかして…、鉄丸?　御本人様?」

「もぐっ!」

勢い良く頷いた。まさか、そんな…本当に、本当にあの鉄丸なのか!?

「うおおおお、鉄丸う!　お前も無事だったのかあああああっ

「！」

「もごごー！ー！ー！っ！？」

思わず飛びかかって抱きしめる。だって、最後の戦いの最中行方不明になってたんだ、心配してたんだよ！ 魔族の大軍に単身突っ込んだりムチャばかりしてたから、てつきり死んじゃったかと思ってたのに！

「鉄丸、鉄丸、良かった死んでなかったー！」

「も、もごご、アホか、今死んじゃうでしょーっ！」

鉄丸が風間先輩の姿に戻る。俺は慌てて先輩から離れた。なんだよ先輩、感動の再会シーンだったのに。

「ぜー、ぜー、何処が感動よ…！」

そう言ってから、一つ咳をして息を整えた。

「これで分かったでしょ。私がアナタを呼んだ理由」

「ああ。また会えて嬉しいよ相棒」

ブウンッ！

「おわっ！？」

違ったようだ。

「この馬鹿！ 本当に物分かり悪いわね！ 分かった、じゃあーから説明してあげるからしっかり聞いておきなさい！」



魔剣を避けてへたり込んだ俺を無理矢理起こすと、部屋のパイプ椅子に座らせる。なんだなんだ、これから何が始まるんだ。不安な顔で先輩を見ると、先輩は大きいため息をついてから話し始めた。

先輩は俺と同じく、こつちの世界から向こうへと旅立った存在だった。神から与えられた能力は、どんな武器でも装備出来る能力。およそ武器防具であればどんな物でも使いこなせる。先輩は向こうについてから直ぐに、強力な武器防具に身を固めてヒーロー気分を味わっていたらしい。

しかしそんな生活も一つの武器を手にしてから変わってしまう。それが魔剣ヴェンジェンス。装備した者を不幸にする、呪われた武器だった。一度装備すると外れないこの魔剣は、次から次へと呪われた武器防具を引き寄せる。また口々に考えないで装備しちゃった先輩はみるみるうちに呪われた武器防具で全身を埋め尽くされてしまった。

呪いをかけたのは、魔王。魔王でなければ呪いは解けない。そんな話を聞いた先輩は、当時魔王討伐に乗り出していた俺のパーティに入る事にした。いつか魔王と会って、呪いを解かせてみせる。そんな想いを胸に俺と数多くの戦火をくぐり抜けて来たらしい。ところが…

「最後の戦い。アナタ、覚えてるわよね？」

「そりゃ勿論。えーと、一々相手の城の中に入るの面倒だから、遠くから一斉に魔法の砲弾を放ったんだ。世界中の魔法使いに作って貰って…」

魔王の城に遠くから一斉射撃。そして城は爆発炎上、しまいに蒸発。魔王は跡形も無く消し飛んで…

「交渉出来なかった？」

「こくん、と頷く先輩。あちゃー…そりゃ怒るわ。」

「それどころか、魔族の大軍に突っ込んだ私ごと魔法の砲弾で吹っ飛ばしたじゃない。呪いの武具のおかげで助かったけどね」

「まさに不幸中の幸いですね」  
「ブウンッ！「うひゃっ!？」」

「いい？ 次ふざけたら殺すわよ」

「ふあい…」

「俺は反省した。」

先輩は皆が神に願いを聞いて貰っている中、何とか意識を取り戻して自分も願いを叶えて貰った。それは俺と一緒に元の世界に戻る

というもの。元の世界に戻れば呪いも無効になると考えたんだ。しかし、チート能力がそのままだった。

先輩は、呪いの武器防具を装備可能なまま現実世界に戻る。そして、何故か呪いもそのままついてきてしまった。ついでに、何時でも武装可能というオマケ付きだ。

「なんか…あんまりですね」

「そうでしょう！？ そう思うでしょう！？ 言っておくけど、気持ちが高ぶったり怒っても勝手に武装が発動しちゃうのよ！ こんな身体じゃ、お嫁に行けないわよ…もごもご」

さめざめと…いや、もごもごと泣き始める。ああ、それは可哀想な事をした。確かに俺がチャンスをつぶしちまったよ。悪かったと思ってる。だから、頼むから武装解除してくれ。鉄仮面で泣かれるとそら恐ろしいものがある。

「という事は、俺を呼んだ理由はその呪いをどうにかしろと」

「もごごっ！」

なるほどね。

「無理だっ！」

「もっ！？」

即答。

「だって、俺魔王じゃないし。呪いの事なんて分かるワケねえよ」

そう言つと、先輩はプルプル震えだした。ああ、ヤバい。こりや噴火する。初めて鉄丸を『ダンゴムシ』って呼んだ時並の噴火がくる。

「もごもごもごもーっ!」

「何言つてるか分かんねー!？」

先輩の噴火と同時に俺は生徒会室を飛び出した。先輩も魔剣を手に俺を追う。おいおい、まだ生徒が残つてる校舎をその姿で走り回るつもりか!? しかしどういうワケか、校舎の中には人の気配がなかった。

しまった…。こりや、呪いか。確か煉獄のマントの特殊能力だ。異空間を作り出して閉じ込める奴。最悪だ。こうなつたら先輩説得して落ち着いてもらうしかない!

「先輩、大丈夫だ! 世の中には色んな趣味の人がいる! 甲冑フェチとかと結婚すりゃいいじゃないか!」

「もがーっ!」

死神の鎌が投げつけられた。なんでだよ、いい事言つただろ!? しかしお気に召さないらしい。どうでもいいけど、鉄丸の格好で追いかけてくると古い冒険映画を思い出すね。洞窟をデカい岩が転がってくる奴。

「先輩、可愛いから! 鎧とかで見えないけど可愛いから自信持て!」

「もがあっ！ もがもがあっ！」

これもダメかよ！ 気難しい女だな！？ 今度は馬鹿でかいマグナムから呪いの弾丸が放たれる。一体どれだけ呪われてんだ。

その後も俺と先輩は誰も居ない校舎の中を叫びながら追い掛けた。俺がどれだけ身体強化してスピードアップしても、先輩は先回りして追いついてくる。下手なホラー映画よりも全然怖かった。

そして…

俺は屋上に追い詰められる。

「せ、先輩。もう、降参！ 分かった、分かったからまず落ち着け！」

「もごーっ、もごーっ！」

駄目だ。もはやバーサーカーと化した先輩に話は通じない。どうしたもんかと迷っていると、先輩は無言を言わず突っ込んで来た！

「もがああああっ！」

「ちっ！ 少しは話を聞きやがれ！」

突進してくる先輩。俺は両手を上げて襲いかかってくる先輩の鎧を掴むと、後方に倒れながら腹部に強烈な蹴りを入れる。それは、柔道で言う所の巴投げだ。先輩の身体は宙を舞い…

ガシヤアアアッ！

「はいっ!？」

屋上のフェンスを突き破った。甲冑の硬さと重さに、耐えられなかったらしい。

先輩が、落ちる。

いくらなんでもこの高さ、無事で済むはずが無い! しかも異空間化したままじゃ病院にも行けないじゃないか! それだと先輩が死んで…

「うおおおおあああっ!」

駆け出した。身体強化で脚力を強化し、踏み切った所で飛行能力を解放する。落ちてゆく先輩の身体に何とか追いついて…

キャッチ!

そして、次に強化するのは…クソ、間に合わねえ! 甲冑の重みに負けて、身体は飛行能力を失う。どんどん近づいてくる地面。せめて先輩だけでも助けないと…っ!

しゃあない…裏技だ。身体強化の、最終奥義。それは…

『生命力強化!』

身体に尋常じゃない生命力が宿る。これで、何があっても生き延びる! 骨が折れようが肉が裂けようが…嫌だなあ…。

ズガアアアアアアンツ！

凄まじい音と共に、衝撃が俺を襲った。俺は先輩を守る肉のマトとなる。クソ、もはや痛みすら感じないくらいの衝撃だ。でも大丈夫、寝れば治るんだから…。俺は薄れゆく意識の中、先輩の無事を確かめて…意識を手放した。

目を覚ますと、俺は夜空を眺めていた。

さすがに死んじまったのかな。空にはやけに綺麗な星がたくさん出てるつてのに、頬には雨が当たってる。それが先輩の涙だと気づくまでには、かなりの時間がかかった。

「先…輩？ ああ、生きてたんだな。良かった」

「う…うう…、佐藤、君…グスツ…」

俺はどうやら先輩に膝枕してもらってるらしい。身体は…ははは、  
凄いな。完全回復してやがる。我ながら怖い。

「ごめん、先輩。悪ふざけが過ぎた。呪いの件なら俺が何とか解除  
方法見つけるよ。だから、それで許してくんねえかな」

そう言うと、先輩は首を振った。え、だめ？

「ちが、う！ もういいの！ 私、我慢する…から！ ごめんなさ  
い、佐藤君、う、うあああ！」

泣きじゃくる先輩。あー…、良く分かんないけどゴメン。目の前  
で死にかけて俺見て怖くなったか。そうだよな、ファンタジー世界  
で死にかけるのどこっちで死にかけるのは怖さが違う。それに幾ら  
先輩が強かったって、高校三年の女の子だもんな。泣いて当然だ。

俺は起き上がると、先輩を抱きしめ背中を撫でて宥めた。しばらく  
くそうしていると、先輩もやっと平常心をとり戻す。少し顔を赤く  
しながら、俺から離れた。

「ありがとう、落ち着いたわ」

「うん。良かった」

目元をハンカチで拭きながら、先輩は少し照れて笑った。なんだ、  
普通に可愛いじゃないか。

「先輩。真面目な話、呪いの事で困った事あったら相談してくれ。  
クリクリもこっちにいるから何か力になれるかもしれない。それに、



あのクソつたれな神もこつちに来てる可能性もあるし。魔王は無理でも、神ならその呪いも解けるかもしれないしな」

「佐藤君……」

先輩が瞳を潤ませた。

「ありがとう。佐藤君も、困った事があつたら言つてね。私とアナタは、向こうじゃ最強のコンビだったんだから」

「ははは。うん、分かつた相棒」

二人で笑いあう。なんか変な感じだな、あの鉄丸が先輩だなんてでも、この雰囲気は確かに鉄丸だった。

先輩が、マントの特殊能力を解除する。世界は元に戻り、通りからは車の走る音が聞こえてきた。時刻は夜7時半、今から急いで帰れば夕飯ギリギリか。そんな事を考えながら、俺と先輩は何とは無しに屋上を見上げた。あそこから落ちたのかあ、なんて見てみると

「「あ……」」

ハモる。

屋上のフェンスが破壊されているのが、すっかり見えたからだ。

「……先輩。生徒会としてはこれは問題ですよね」

「うー……」

複雑な顔をする。大体、このまま夜の学校にいたら宿直の先生に見つかっちゃう。ぶち壊れたフェンスと関連づけられ犯人扱いされるのは目に見えていた。

…次の瞬間、俺と先輩の心は一つになる。

「逃げるぞ、先輩！」

「もがっ！」

あ、ずりいぞ覆面とか！

俺と先輩は、また追いつきかけっこをしながらそこから逃げ出すのだ。  
った。

## 第七話 始まりの本

夜の学校から帰って来たら、やはりというか何というか親父に怒られた。まあ門限の7時を思いつきりオーバーしてたから仕方ない。「遅くなるなら電話しろ、夕飯には間に合わせろ、一家団欒をおろそかにするな、たまには父さんと一緒に夕飯食べよう、でなきゃ寂しくて死んじゃうぞ!？」とか鬱陶しかった。じゃあ死んじゃえと言ったら紗英さんに怒られるし。

「私のダーリンを泣かさないで！ 泣かすなら私を泣かせなさい！」とか意味不明な事をのたまうので意表をついて紗良を泣かせようとしたら鼻息を荒くして迫ってきて俺の方が泣きたくなった。どんな一家団欒だ。

夕飯を済ませて風呂に入り自分の部屋へ。その間、紗良は珍しく俺にちょっかい出して来なかった。反省してたのだろうか。それなら俺ももう少し優しくしてやろうかな、なんて思いながら明日の学校の準備をしていると、鞆に入ればなしにしていた携帯電話が何やら点滅している。着信があった時の点滅だ。

「誰だ、一体…」

見ると、知らない番号。気になってかけてみると、凄く聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『健司様！ 私です、クリクリです！』

クリクリだった。というか、自分でそのアダ名言うか。

「クリクリ…? さっき電話くれたのってクリクリだったのか。よ

く番号分かったな」

『はい、ステラに調べてもらいました！ 私、今日携帯電話という物を買ったんです。それで、やはり最初にかけるのは健司様がいいと...』

なるほど。それは嬉しい限りだが…あのメイドさんもとんでもないな。こっちじゃ探偵でもやってるのだろうか。

「凄いな、どんな携帯買ったんだ？」

『えっと、スマートなんとかというものです』

.....。

俺はガラケーだと言っのに。

あれだね、ファンタジーな世界の人にこっちの文化や流行で先を行かれるとそこはかとなくショックだね。

「そ、そうか。使いこなせばかなり便利らしいから、クリクリの社会勉強にはいいかもな」

『はい、使い方は魔法で覚えましたから。ネットで色んな事を調べるのが楽しくて仕方ありません』

魔法！ いいな、魔法つて万能で！ というかマズい、完全に置いて行かれてるじゃないか！ そのうちクリクリが「ググレカス」とか言い出したら泣くぞ、俺は。

『ところで…健司様、今日の生徒会からの呼び出しはどうだったんですか？ 昨日の件で何か処分を受けたりとかしました？』

「ん？ ああ、それは大丈夫だよ。心配ない」

そうか、それが気になってたか。いい機会だし、今鉄丸の事を話してしまおう。

俺は鉄丸…風間先輩の事を話した。俺と同じで此方の住人で、あろうことが生徒会副会長の女の子だった事。こっちに帰って来たのはいいけど呪いまでついて来ちゃった事などを。

『女性…の方だったんですか。てっきり私は殿方だとばかり…』

「ああ、俺も驚いた。ダンゴムシとかアルマジロとか言いたい放題言って来たけど、悪い事したよな。少なくとも、女の子に言う言葉じゃなかった」

あんまり速く動くから鋼鉄のゴキブリって呼んだ時もあったな。

本気で殺されかけたけど。

「それでさ、クリクリって呪いの解除も出来たよな。今度風間先輩に会って呪いを解いてやってくんないかな。魔王の呪いだから無理かもしれないけど、一度見てやって欲しいんだ」

『そうですね。実際に見てみないと解除出来るか分かりませんが、呪いに苦しんでいる方を放ってはおけませんから』

「助かる！ じゃあ、セッティングは俺がやるから頼むよ。明日の放課後にでも見てやってくれ！」

俺がそう言うと、クリクリは『任せて下さい！』と声はずませた。ああ、きつと電話の向こうでは胸をはって得意気な表情をしているんだろっな。俺に頼み事をされると凄く嬉しそうにするんだ、ク

リクリは。それは此方に来てからも全く変わっていない。

頼られてテンションあがったのか、その後他愛の無い話をしていてもクリクリは終始ご機嫌だった。そろそろ寝ようかと切り出した時も、もっと話したいというようなオーラが伝わって来るくらいに。そして最後にこんな事を言った。

『今日は私の身体を気遣ってくれてとても嬉しかったです。こうして1日のおしまいに声まで聞けて、とても幸せです。明日も学校で健司様とお会い出来るのを楽しみにしてますね。それでは、おやすみなさい』

「あ、ああ、おやすみ。暖かくして寝るよ」

通話ボタンを切る。

あの、何て言うかその…

すげー嬉しい。何でこんなに幸せなんだろう。学校行くの面倒くさいとか言ってた頃が思い出せない。クリクリが居るならどこにだって行くさ！俺はベッドの上で嬉しくてピョンピョン跳ねた。

これがリア充か！これがリア友か…いや、恋人か！まだ告白してないけど！

「しくしくしくしく…」

ん？

「しくしくしく…」

なんだ？ 誰かのすすり泣く声。声は近くで聞こえるのに、姿は見えない。うわ、幽霊か！ 怖いよ、向こうでもアンデッドは苦手だったっていうのに！

「しくしくしくし…ゲホッ、埃が、ゲホッゲホッ！」

「そこかああああっ！」

ベッドから飛び退いて床に這いつくばる。ベッドの下を覗き込むと、そこには涙と鼻水で訳わからない事になった紗良がいた。

「浮気者！ 兄さんの浮気者お！」

「ベッドの上でもっと飛び跳ねていいか？」

「あ、やめて、今出ます、すぐ出ますから！」

慌てて這い出てくる紗良。コイツこそゴキブリみたいだ。

「…大人しいと思ってたら忍び込んで隠れてたのか。何が狙いだっ  
た？ 電話の盗み聴きか？」

俺が睨みをきかすと、途端に紗良はシュンとする。ああ、これは女の子相手にする事じゃないな。モンスターを散々殺してきた俺の睨みは普通のヤツにはキツいだろう。

「違うの、私はただ兄さんが眠ったらこっそりベッドに入って一緒に寝たかっただけなの！…ごめんなさい、兄さん怒らないで…」

む。なんかしおらしい。

仕方ないな、一緒に寝るくらい許してやるか。

「分かった、だったらシャワーでも浴びて身体の埃を落として来い。そんな面倒な事しなくても素直に言えばいいのに」

「うう…ありがとう、兄さん！」

紗良は瞳を潤ませて喜んだ。そして風呂場へと向かう為部屋を出る時、俺の方へと振り返り…

「あの、覗いてもいいんだからねっ！ なんなら一緒に入っても…」

「アホかー！ーっ！」

慌てて逃げて行った。

しかし俺、大丈夫だろうか。寝てる間に食われたりしないよな？

新しい朝がやってきた。

そこに希望があるかどうかは定かでは無いけどな。

とりあえず俺が着替える為にベッドから出ようとすると…

ガシッ！ 身体に絡みつく何か。いや、紗良なんだが、なんか凄



い絡みついている。これはアレか、プロレスの技か。外れないんだけど。

「お、おい紗良。起きてくれ。俺が出らんないだろ」

「うにゅ…兄さん、おっ起すゆの？ 出してもいいよ…」

「何の話をしてるんだ、離せつてのに」

頭を掴んでブンブン振ってみせる。紗良は目をつぶってそれに必死で耐えていた。コイツ…

「残念だなあ。紗良が言う事聞いて離してくれたら、おはよつのキスクらいはしてあげるのに」

バツと離れた。分かりやすいな。

目をつぶったまま空中に唇を突き出す紗良。俺は急いで布団でグルグルに巻くと梱包用のビニール紐で縛ってやった。

「に、兄さん！？ おのれ、計ったな！」

「計るわボケ！ ついでに縛ってやった。着替えて出て行くまで大人しくしてろ！」

「こんな縛り方ヤダーっ！」

縛り方の問題なのか。なんかじっくり着替えを見てやるとか叫ぶから冬用の毛布で顔面も巻いてやった。着替えの最中、「妄想してやる！ 凄い妄想してやるんだから！ ああっ、そんな！？」とか

言っただけで完全無視。一体、どこで育ち方を間違えたんだろうな、コイツは。

着替え終えてから布団を取ってやると、そこには真っ赤な顔で意識を朦朧とさせた紗良の姿。何だか幸せそうだったからそのままベッドで寝かせてやった。

いつもの慌ただししい朝を乗り切って学校につくと、昨日よりもたくさん挨拶される。なんだ、もしかして俺、人気者？ 挨拶だけで調子に乗れる俺は幸せ者だな。

そんな俺に一番の幸せが。

「おはようございます、健司様！」

天使降臨。この瞬間、この世界は天国となる。気分的に。

「おはよう、クリクリ。ちゃんと眠れたか？」

「はい！ 健司様におやすみって言ってもらえたから、グッスリ眠る事が出来ました！」

いやー、笑顔が眩しいわ。それにしても、こういう会話って周りの人間にしたら鬱陶しいもんだろ？ なんてか知らないけど敵意が

感じられない。女子なんかは、楽しそうに此方を見ている。

俺は、そこら辺を近くにいた轡田に聞いてみた。すると、意外な答えが。

「なんかね、佐藤君が必死に紳士ぶるのが楽しいみたいだよ。男子も女子も、二人の事観察しながら勉強してるみたいだし」

…あれか、恋愛の実演レッスンか教材ビデオみたいなもんか。俺とクリクリとか、例として特殊過ぎるだろ。

クリクリは何の事か分からずキョトンとしていた。分からなくていい。これからは、皆の前であんまりカッコ悪い真似出来ないな…。そんな事を思ったりした。

今日は、至って普通に時間が流れた。最近、トラブルが段々時間を遅らせてやって来るから油断はできないが、俺のアラームも鳴ってないし今日はもしかして…と淡い期待を抱かせる。そしてついに、放課後。

勝った。

俺は勝ったんだ。

今日は残す所風間先輩と会う用事のみ。その前にアラームが鳴ら

ないという事は今日は平和だという事だ。よしっ、とガッツポーズをする。俺は昼休みにアポをとっておいた風間先輩の下へ、クリクリを連れて意気揚々と向かって行った。

生徒会室には、風間先輩が一人で佇んでいた。クリクリとは向こうでは長い時間を過ごしたが、素の顔で会うのはこれが初めてだ。

「クリス姫…お久しぶりです」

「鉄丸…さん？ あなたが本当に、あの鉄丸さんなのですか？」

信じられない、という表情をする。無理も無い、外見だけなら華奢で生真面目な秀才タイプの女の子だからな。神経質そうな表情と、あの適当で豪快な戦い方が結びつかない。苦笑いした先輩は、身体を呪いの武具でまとつてみせた。

「……っ！？ ああ、本当に鉄丸さんなのですね！ 良かった、姿が見えなかったので心配していたのです！」

「も、もっ！？ もっ！……っ！？」

抱きついて、クルクル回るクリクリ。クルクルとクリクリって似てるね。

「止めんか佐藤……っ！」

怒られた。あーあ、変身解いちゃったのかよ。鉄丸のフォルムって個人的にツボなのになあ。

「と、とにかく！ 私が鉄丸で間違いないわ。もっとも、風間理沙って名前があるからそっちで呼んで欲しいけどね」

理沙：そんな名前だったのか。可愛いな。そう言くと先輩は顔を赤らめて、クリクリの周囲の温度が下がった。なんだ？

「理沙さん、健司様から呪いを解く方法を探していると伺ったのですが」

「ええ、魔王も死んじゃったし、どうしていいか分からなくて…」

俺抜きで話が進んじゃった。なんか怒らせた？ とりあえず口出ししないで見守ろう。

クリクリは早速、先輩の身体を調べる。右手が小さく光り、先輩の身体の表面をなぞった。先輩はくすぐったいのか時折小さく身体を震わせる。なんかちよっといけない雰囲気醸し出してないか？俺はドキドキしながらそれを眺めていた。そして…

クリクリが、額に汗をかきながら首を振った。

「すみません。理沙さんの呪いは恐ろしい力でかけられていて、私のようなレベルのヒーラーには太刀打ち出来ません…」

「そ、そっか。うん、分かった。多分、無理じゃないかなって思ってたから。手間取らせてごめんなさい、クリス姫」

「いえ：私こそお力になれなくて申し訳ありません」

何だか、暗くなっちゃったな。しかしクリクリだってそれなりにレベルの高いヒーラーのハズだ。それ以上のヒーラーなんてこっちの世界にいる訳ないしなあ。

「やっぱり、ここは神に直接頼むしか無いんだろうな。クリクリは神がどこにいるか分かるか？」

「いえ、見当もつきません。ただ、健司様の能力が神様から与えられた物ならば、その能力が消えてない以上此方の世界に居るのではないかと思えますけど…」

なるほど。そう言われてみればそうだな。そんな事を考えていると、先輩が不思議な事を言った。

「私も住所とか調べて行ってみただけど、いつも留守なのよ。出版社の方にも問い合わせしてみたけど、おかしなファンと勘違いされて門前払いされたわ」

住所？ 出版社？

「知らないの？ ほら、私たちが向こうに行くのってゲートの書が必要だったでしょ。その作者が神じゃないかって思って、調べただけど」

そう言って取り出したのは、一冊の文庫本。ああ、思い出した！ そうだよ、俺も初めて向こうへ飛ばされたのは学校帰りに買ったライトノベルがきっかけだった！ どうして今まで忘れていたんだ！

「先輩、その本って向こうの!？」

「ええ。私たちが体験した事が、記録されてるの。あなたも持つてるハズよ。つて、ちよつと!？」

有無を言わず奪いとつた。表紙…ああ本当だ! 向こうの風景そのまんまじゃないか! 中を開けると、丁寧に挿し絵まである! そこには鎧を脱いだ風間先輩が生まれたままの姿で「誰も見てないわよね…」と、恥じらいながら…」

「何読んでんだバカー…!」

パコーンッ!

殴られた、上履きで。

「よりもよってお風呂の記録とか、どんな確率よ!…とにかく、この本の表紙を見て!」

「えーと…『呪い呪われ修羅の道』。先輩、凄い体験してたんだな」

「違っつ! その下、作者の名前見て!」

なんだよもう…。視線をずらして行くと、そこには漢字一文字で作者の名前が記されてあった。そこにある漢字とは…

『神』

分かりやすいな、オイ！



## 第八話 紗良のお土産

俺がファンタジー世界に行く事になったキツカケは、一冊のライトノベルだった。表紙も、内容も立ち読みした時は有りがちなもので、なんで買ったのかも思い出せないような本。ただ帰って来てからいざ読もうとしたら中身は何も書いていない白紙になっていて、俺が困惑していると本は真っ白な光を放ち始めた。次の瞬間、俺はファンタジー世界へと飛んでいて…というのが、俺の冒険のはじまりだ。

神はそれをゲートの書と呼んでいた。世界移行に必要な適性のある者を見つけて出す道具だと言う。俺は店で購入するという方法で手に入れたが、適性の無い人間には手元に行かないようになっていたらしい。

「先輩はその本をどこで手に入れたんだ？」

「私？ 私のは元々日記帳だったのよ。ほら、中身が白紙の文庫本みたいな日記帳あるでしょ。あれを近所の文房具屋さんで買って、家に帰ってさあ書くぞって時にゲートが発動したわ」

なるほどねえ。で、戻って来たらライトノベルが出来ていたと。

先輩にとっちゃ、向こうでの日記みたいなもんか。

「…佐藤君のゲートの本は？ あなたの所にも必ずあるハズよ。どんなタイトルになってるか気になる所ね」

うーん…。好き勝手やってたからなあ。超絶俺様伝説、とか寒い事になっていそうだけど。そう言うと、クリクリは強く否定する。

「健司様は、好き勝手になんかやっていますよ。いつも私たちを守って、困った人がいたら助けてあげて…仲間の人たちが行く先々でトラブルを起こしても、健司様が真っ先に頭を下げたりしてましたし…」

「確かに、佐藤君で面倒見がいいんだなって思ったわ。『苦勞人一代記』とかかもしれないわね、タイトル」

やだよ、そんなの。

第一、トラブルを逐一解決してたのだからゲームの世界だと思っただけからなんだよね。RPGにありがちな、お使いイベントとか。物語を盛り上げる為のイベントなんだろうなー、って思ったら大抵の事は我慢出来たんだよ。

そう言い訳してみたけど、クリクリと先輩はニコニコ笑って信じてくれなかった。「照れ隠しだね」とか「どんな理由だろう」と健司様の優しさは変わりません」とか、勝手にいい風に受け取ってしまう。俺は…顔が真っ赤になるのを止められなかった。

「と、とにかく！俺も帰ったらその本探してみるよ。神の居場所に関するヒントが書かれてるかも知れないし」

「そうだね。何か分かったら、連絡して頂戴。あ、私の携帯の番号教えとくわ」

そう言つと、先輩はデコの激しい携帯をカバンから取り出す。全く、女の子って何でゴテゴテいるんな物付け探すんだろうな。なんて思っていたら…

「……………」

なんかクリクリがじーっと見てる。凄い興味津々な感じで。

「理沙さん、それはなんですか？ 私、初めて見ます」

「え？ 何って、デコレーション。お店で売ってるの貼り付けただけよ」

あー、これはクリクリがハマりそうだな。可愛いの好きだからな。  
「クリクリ、先に言っておくがお前の携帯はタッチパネル式だし、余計な物貼り探すと何が起こるか分からない。やめとけ」

「ええっ！ そんな、こんなに可愛いのに！ とうにかなりませんか？」

分かんねえよ、ガラケーの俺には。先輩もクリクリがスマホを持つてる事にシヨックを受けていたようだった。そりゃそうだろう。俺も親に頼んで機種変しようかな。

何はともあれ、俺とクリクリは先輩と番号を交換してから、その日は解散する事にした。クリクリは先輩のデコに衝撃を受けたよう。で、とうにかして携帯を改造してやると息巻いていた。あー、クリクリって自分の好きなジャンルに関しては人が変わるからな。今はそっとしておこう。一方俺は、携帯のアドレス帳に女の子の番号が増えて嬉しかった。家族以外ではクリクリに次いで二人目だ。やけに嬉しい。名前は鉄丸で登録した。

さて、その日の帰り道。クリクリをマンションに送り届けてからのんびりチャリを漕いでいると、不意に何かを察知する俺の第六感。嘘だろ、嘘だろ、嘘だと言ってくれ！ 今になってアラームとかやめてくんないかな！？

家に近づくほど、警戒音が高鳴っているような感覚。マズい、家で何か起きてるってのかよ！ だとしたら、理由は一つ。俺のゲートの書しか思い当たらない！

「やめてくれよ、自宅だけは安全で平和な場所であって欲しいのに！」

急いでチャリを漕いで家に向かう。到着してすぐさまチャリを車庫に入れると、俺は帰宅の挨拶もそこそこに猛ダツシュで部屋へと駆け上がった。どこだ、どこだ、俺の本！ 枕元に設置した小さな本棚には…無い。じゃあ机の上…にも無かった。引き出しの中にも、カバンの中にも、秘蔵の工口本の隠し場所にも無い！

嘘だろ、どこにやったんだ！？

心臓をバクバク言わせながら、俺は途方に暮れる。そしてしばらく考えを巡らせて…一つの可能性に行き当たった。

紗良が持ってたか？

そつだ、間違いない。俺は新しく買った文庫本とかはしばらく枕元の本棚に入れるようにしている。ここに無い訳がないんだ。なら、誰かが持っつていったんだろう。この場合、犯人は紗良以外に考えられなかった。

「あんにやる、勝手に持っつて行きやがっつて」

俺は意を決して紗良の部屋へて向かう。最近の肉食系女並にワイルドな紗良の部屋へ行くのは勇気が要っつたが、俺は勇者だ。行かざるを得まい。

「…紗良…入るよ…」

滅茶苦茶弱腰でドアを開けた。いや、だっつて、どんなセクハラされるか分からんし。居なかつたらラッキー、と思いながら忍び込んだんだが…

結論から言おう。紗良は部屋にいた。けど、寝ていた。

これ幸い、と俺は紗良を起こさないように本棚を探る。無いなあ…少女漫画ばかりだ。えーと、何々？ 『兄 兄パラダイス』 『兄さん事件です、私が起こしました』 『血が繋がっつてないならEじゃない』 『背徳の契りは危険なロマンス』 『プリズナー 閉じられた禁断愛』

……。

うん。なんか、怖い。

俺は嫌な汗をかきながら本棚から離れた。その時、紗良の机の上に見知っつた風景が描かれた一冊の文庫本を見つける。あ、これだ！

見つけたぞこんにやる！ やっぱりお前が犯人だったのか…。勝手に物を持ち出すのはいけない事なんだぞ？ 起きたら、叱ってやらないとな。

俺はゲートの書を手に取って、表紙を見た。間違いない、俺が初めてファンタジー世界に飛んで行った時に見た風景だ。えーと、気になるタイトルはと言えば…

『勘弁して下さい』

……………。

凄く納得出来るのが悲しい。

けどこんなタイトル、先輩には教えらんないよな。『呪い呪われ修羅の道』の方が遥かに格好いいじゃないか。しかしこんなタイトルの本、紗良もよく読む気になったもんだ。そこまで考えて、俺は気づいた。

なんで、紗良がこの本を手に来たんだ？

確か、適性の無い人間の手元には行かないようになってるんじゃないか？

俺は、嫌な想像をしてしまう。まさか、紗良に適性が？ いやそれこそまさかだよ。第一、向こうは平和になっただし、救世主を望んじやないだろ。神がこれ以上誰かを世界移行させる必要なん

て無いハズだし。

そう思いながら、俺はベッドで眠る紗良を覗き込む。紗良はぐっすりと眠っていた。とても穏やかな寝顔だ。紗良、大丈夫だぞ、お前まで向こうに行つて危険な目に遭うような事にはさせない。お前は俺が守つてやるからな。そうつぶやきながら視線を移して…

俺は愕然とした。

眠っている紗良の手には、しっかりと一冊の文庫本が握られている。その表紙には俺の持つ文庫本と同じ風景が描かれており、冒険者然とした格好の紗良が描かれていた。タイトルは…

『お義兄ちゃんは勇者様！？ 知られざる兄さんの秘密に迫り、ついでに大戦の名所を巡る三泊四日のグルメツアー！ 各地の名産品も特集しています』

なんじゃこら。

これは…ライトノベルなのか？ なんか旅行雑誌みたいなフレーズとかあるし…でも、向こうに行つたのは確かなようだ。俺は頭を抱えた。

紗良が、向こうに。

あいつ、帰つて来れるのか？ 俺の場合は魔王討伐の褒美で帰っ

てこれだが、コイツの場合遊びに行っただら？ 三泊四日とか言ってるが帰れる保証なんて無い。ファンタジー世界を甘く見てはいけない。向こうはペットで飼われてる小動物でさえ炎を吐く世界だ。

神よ、恨むぞ流石に。紗良はな、エキセントリックな言動は大きなマイナスだけど、普通にしてれば可愛い妹なんだ。俺は、空いてる方の紗良の手を握った。無事に帰って来てくれ…頼むから、無事に…

そんな想いで手を握っていると。

「…あれ？ 兄さん？」

紗良が目を覚ました。

「紗良！ 良かった、無事だったんだな！」

「あれ、ガイドさんは？ 迷子はどこに行ったの？」

「は？ 迷子？」

何を言ってるんだろうか。紗良は寝ぼけ眼をゴシゴシ擦ってから、俺の顔を見る。段々と焦点が合って来て…

「兄さー…んっ！」

ガバツと抱きついた。

「兄さん、やっと会えた！ 帰れないかと思ったよう！」

「あ、ああ。俺も気が気じゃなかったよ。お前が向こうで辛い目に遭ってないか心配で仕方なかった。大丈夫か？ 嫌な思いとか、し



なかつたか？」

「うん…」

目を拭う。

「兄さんの妹だって言ったら、毎日ご馳走三昧、我が儘し放題だったよ」

パソコンッ！

文庫本で叩いてやった。

「俺の威光で放蕩三昧とか良い身分だな、コノヤロウ！ 名所巡りつて、かなり広範囲だぞ！？ 世界中に迷惑かけて帰って来たんじゃないだろうな！」

「た、叩く事ないでしょ！ 私だって、盗賊団壊滅させたり良い事して来たんだから！」

本当かよ。

俺は紗良の本を奪い取ると中身をチェックする。挿し絵の量が異様に多いのは、コイツの好みなのだろうか。パラパラとめくって行く…

いかにも盗賊、という男に追いかけられる紗良の絵。次に牢屋で盗賊と紗良が何やら話している絵が続き、その次にテーブルを挟んで商人と盗賊が交渉する絵。テーブルの上には大金が描かれている。そこに兵士がなだれ込んできて…

大金の入った袋を持って走り去って行く紗良の絵でしめられていた。

「お前が盗賊か!？」

「お、囹捜査の正当な報酬よ！ それに他にもちゃんと兄さんの妹として、その名に恥じない活躍はしたもん！」

しかし目に飛び込んでくるのは英雄とはかけ離れた姿ばかり。モンスターサーカス団では希少種のユニコーンを逃がしていたが、その際サーカス会場を花火の火薬で爆破させてたり。国王暗殺を企てた男の手下を金で買収して裏切らせ、その手下もろとも兵士たちと共に捕まえてみせる、など。結果は良い事をしているように見えて手段は滅茶苦茶だった。

「お前はアレか、スパイか工作員にでもなりたかったのか。それとも王国の兵士たちを同行させて世直しの旅か」

「違うよー。私は単に兄さんが旅した場所を巡ってただけだもん。トラブルの方が勝手にやって来ただけですよー」

ぶー、と膨れ面する紗良。けど、何はともあれ無事で良かった。俺と違って紗良は頭の回転が速いし、どこでも順応出来る逞しさがある。だから生き延びると思っていたが、こうして実際に戻ってきてくれると安心するよ。俺は思わず紗良を抱きしめた。

「良かった…。帰って来てくれてありがとうな、紗良」

「兄さん…」

紗良も俺の背中に腕をまわす。やはり、寂しかったんだろう。震えていたし、帰って来た事を実感するように俺の胸に顔をすり寄せていた。閉じられた目蓋、頬を一筋の涙がたう。ああ、怖かったな。これからは、もう安心だからな。俺は紗良の背中を優しく撫で続けた。

どれくらいそうしていただろうか。俺はベッドの上で紗良を抱きしめていたが、そのベッドの一角に何やら不思議な膨らみを見つける。なにやら、布団の下に何かあるようだ。微かに上下しているようにも見える。

「紗良…。お前、こっちに帰ってくる時、何か連れて来たりしたか？」

「…え？ ううん。えっと、最後に魔王城跡の見学して…迷子がいだから一緒にお母さん探して…いきなり大きな渦が空に現れて、吸い込まれたの。お土産とか買う暇なんて無かったよ」

嫌な予感がする。

アラームは未だに鳴り続けている。まさかね。んなワケ無いって。俺は頭に浮かんだ嫌な想像を振り払った。そして、紗良から一旦離

れて布団に手をかける。

捲れば、ハッキリするんだ。そう、捲れば。しかしなあ…。そんな風に俺が躊躇していると…

「なあに、兄さん。布団入る？」

バツ！

無情にも、紗良が捲ってしまった。そして、布団の下にいた存在を見つけて驚きの声を上げる。

「あ、迷子の子供だ！ 一緒について来ちゃったの!？」

そうか、迷子か、そうですか。紗良には単なる迷子に見えると。俺には違うように見えるなあ…。

そこには、年齢で言えばヨチヨチ歩きを始める位の子供がいた。その頭には小さな角が生え、背中にはコウモリのような小さな翼が。すやすや寝息を立てる口元には、これまた小さいながらも鋭い犬歯がのぞいていた。

ああ。分かってる。今日のトラブルはコレだね？ 現実って厳しいや。俺は目の前の子供から発せられる尋常じゃない魔力にクラクラとする。こりゃ、俺一人じゃどうしようも無いぞ？ だってこの気配は…

間違いなく、魔王本人の物なんだから。

## 第九話 子供ってやつは

実は、俺はただの一度も魔王の顔を見た事が無い。いや、勇者の称号を与えられてから魔王の気配や魔力は察知出来るようになっていたし、最後の戦いでは確実に魔王の魔力を消滅させたから倒してはいるんだ。実際、神だって魔王は倒されたって言ってたからな。

でも実際顔を合わせたのって魔王の配下の魔界將軍とかいう奴らだけなんだよね。そのリーダー格のザムザエルとかいう巨人を倒してからは一気に魔界の軍は崩壊したし。実質的にはザムザエルがラスボスっぽかった。

ちなみにトドメを刺したのは鉄丸。腕力強化した俺が鉄丸を投げて、鉄丸が魔剣ヴェンジェンスを突き刺した。…ザムザエルの肛門に。いやあ、まさかコントロールがあんなに狂うとは思わなかったんだよね。でもってそんな時装備していた黒炎邪竜槍まで一緒に突き刺したもんだからケツの中のメタンガスに引火して大爆発。あの勝利の後、鉄丸は「もがーっ！もがーっ！」って泣いてたけど、今思い返せば嬉しくて泣いてたワケじゃなかったんだな。女の子に対して悪い事をしたよ。

### 閑話休題。

結局俺は魔王に会わずして勝利を収めた。けど、今日の前にいる子供からはあの魔王の気配と魔力が感じられた。魔王は…死んでなかったのか？

「紗良、落ち着いて聞いてくれ。コイツは多分、魔王だ。なんかの理由で子供に戻ってしまっただろ」

「はあ？ 兄さん、冗談はよしてよ。魔王って兄さんが倒したんでしょ」

確かに。倒してはいる。でも死体を確認する前に帰ったからな。殺してはいなかった、と考えるのが自然だろう。

「俺は『勇者』って奴になっちまったから、その対局にある魔王の存在が感知出来るんだよ。コイツは魔王。それは間違いない」

「そんな…」

紗良は絶句した。無理も無い。母親探して回ったって言ってたかな。情が移ってしまったんだろう。気持ちは分かるよ、確かに寝ている分には可愛い子供だ。けどな…

魔王軍の残虐さを目の当たりにして来た俺は複雑だ。

コイツも将来あんな殺戮兵器にならないとは限らない。いや、魔王なんだぞ？ なる確率は高いだろう。

「勇者的には、殺した方がいいんだろうけどな…」

「ダメ！」

紗良が子供の前に身を投げ出す。

「こんな子供を殺すなんて、英雄でもなんでもない！ 私は兄さんに、そんな人間になってもらいたくない！」

紗良…。

「分かってるよ。第一、こっちでそんな事したら捕まるだろ。俺

だって子供に手をあげる奴は最低だと思ってる」

ここは現実世界、しかも日本だ。殺しなんて出来るわけないし、子供相手ならなおさら。少なくとも、俺はそんなゲスにはなりたくない。

俺の言葉に、紗良はホッと胸を撫で下ろした。お前な、俺がそんな酷い事するわけないだろ？ そう言いながら魔王に視線をずらすと…

「ふあ…？」

魔王が目を覚ます！

さすがに緊張が走る。魔力だけなら今この状態でさえ中ボスくらいはあるからな。それに俺、魔王がどんな性格かも知らんし。一体、どんなリアクションしてくるやら…

「う…うう？ あう」

目があった。そして…なんかニコツとしたぞ？ でもって、そのまぶしいばかりの笑顔のまま俺を見てこう言った。

「パパ！」



……。

はい？

「パパ！ パアパツ！」

「に、兄さん！？ いつの間に……」

「いや、おかしいだろ！ 俺がパパって！」

「向こうでモテモテだったみたいだし、不可能ではないわ！ 兄さん、やってくれたわね！？」

「いやいやいやいや！」

体感時間たった一年、それでこんな子供できるわけねー！ 第一童貞のまま一児のパパって悲しすぎる！

「えーと、ボク？ なんで俺がパパなの？」

とりあえず聞いてみると、魔王はヨチヨチ歩いて来て、俺の腕に抱きついた。

「パパ、しゅきっ！」

むう……。

何の答えにもなっていないが……なんか良いな。

「に、兄さん？ さっきは冗談で言ったんだけど、本当に兄さんの子供だったりする？」

「いや、さすがにそれは無い。しかし、これはこれで悪くない気もして来た」

だって、なんか可愛いぞ？ 俺を見上げてエへへとか言ってるし、なんか心がほっこりして来た。今まで子供とか鬱陶しいと思っってきたが、これは認識を改めざるを得ないな。

「兄さん、もしかして…」

「ああ、育てよう！ 殺すとか有り得ないだろ。親父たちにも事情を話して、協力を仰ごう」

「冷静になって兄さん！ 向こうの世界の事、一から説明するつもり！？ いくら母さんや父さんが馬鹿だからって、無理があるですよ！」

紗良の口から冷静になれという言葉が飛び出すとは思わなかった。今更常識人ぶるなよな、まったく。それにサラッと親を馬鹿にしたね？

「安心しろ、紗良。あの二人を信じるんだ。俺たちの親なんだぞ？ きつと助けてくれる」

「兄さん…」

なにやら、ジーンとしてる紗良。

「そうだよな。きつと大丈夫だよな」

「ああ、あの二人の馬鹿は底無しだからな」

「そつちの方向で!？」

勿論ですとも。

俺は甘えん坊な魔王を抱っこすると、台所にいる紗英さんの元へと向かう。今日は親父も早く帰って来てるハズだ。俺は紗良の「無茶よ兄さん!」という声を背中に受けながら、階段を下りて行った。

うちの両親って、本当に馬鹿だと思う。良い意味悪い意味両方あるけど、今回は良い意味で言った。だって、結論から言うと全部信じて受け入れてくれたんだから。

勿論、最初は大騒ぎだった。紗英さんは「紗良、いつの間に! 身体は大丈夫!？」と訳わからん勘違いするし、親父は「避妊くらいしろ、今から何人作るつもりだ!」と、これまたズレた怒り方をした。けど、魔王が二人の声に驚いて泣き出すと途端に子育てモードに移行してなだめ始める。さすが育児経験者、魔王はすぐに機嫌を直した。

二人が俺と紗良のファンタジックな話を信じたのは、その魔王の外見だった。角や翼が生えてるからな。現実に目の当たりにしたら、そりゃ信じるってもんだ。ついでに、俺の特殊能力も打ち明けた。

これに関しては二人ともおかしいとは思っていたらしい。

「怪我の治りが早いのは気づいてたぞ。この間の喧嘩の件は先生から聞いてたからな。風呂上がりのお前がやたらとピンピンしてるから変だとは思ってたよ」

「洗濯物でズボンが血だらけだったのに健司さんは何とも無いみたいで、ちよつと怖かったの。理由が分かってホツとしたわ」

あー…なるほどね。

ズボンの件は、鉄丸…風間先輩を助けた時のズボンだろう。飛び降りて地面に叩きつけられてグロい事になってからの再生。その時の血がついたままだったんだな。真つ赤になった洗濯機見て絶叫する紗英さんが容易に想像出来る。

「そのファンタジーがどうのこうのは分からんが、現実問題として人間じゃない存在がここにいるのは確かだ。お前も面倒な事になってるようだが、親としては出来る限りサポートはするつもりだ。さしあたってはこの子の面倒だが…母さん、頼まれてくれるか」

「ええ、勿論よアナタ。健司さんも紗良も、ちゃんと私が見ていてあげるから安心して学校に行きなさいね」

理解のある親で助かった。当面の悩みは学校へ行ってる間どうするか、だったからな。本当に頭が下がる思いだ。

「ねえ兄さん。ちよつといい？」

そこに紗良が声をかけてくる。

「その子、名前つけてあげたら？　いつまでも魔王とか呼んでるのもどうかと思うし」

それもそうだな。こっちはクリクリや鉄丸もいるし、魔王って言葉にはアレルギー反応示しそうだ。新しい名前…というか、この子って元々なんて名前なんだ？

「なあ、ボク。君の名前は、なんていうの？」

俺に抱っこされてウトウトしていた魔王に、尋ねてみた。魔王はボンヤリ俺を見つめてから、口をひらく。

「あのね、ぱーちゅなの」

「ぱーちゅ？」

なんだそれ。

「おっきな、おうちの、まんのかなの」

大きなお家の真ん中。謎かけか何かだろうか。ぱーちゅ…まさかパーツか？

「パパがドーンてやって、おそとに出してくえたの」

……。

ヤバイ。どうしようもなく頭に来た。ふざけんなザムザエル、お前この子を核に使いやがったな！？ 魔王だなんて嘘っぱちで、あの城を維持する為の燃料タンクに使いやがってたんだ！ なんてこつた、あの時面倒くさがって外から攻撃なんてしないで、ちゃんとコイツに会いに行つてやってたら…普通に救い出してやれたかもしれなかったんだ。子供に戻ったのは、魔力が足りないせいだろう。

俺の…俺のせいじゃないか！

「パパ…？　パパ、泣いてゆの？」

「ゴメン…ゴメンな。ずっとあの瓦礫の中で、寂しかったろ…」

抱きしめる。コイツは多分、寂しいなんて感情すら知らない。魔族に部品扱いされ、いきなり外に放り出されて何も分からず一人ぼっちであの廃墟で暮らしていたんだ。ちゃんと抱きしめて、人の温もりを教えてあげなきゃ…俺はそんな気持ちになっていた。

「お前は、パーツなんかじゃない。これからは、一人じゃないからな。みんな、一緒だからな」

多分、今の俺の言葉から紗良もこの子がどんな扱いを受けてきたか分かったんだろう。震えて、涙を流していた。紗英さんもだ。親父は拳を握りしめて静かに怒っていた。

「健司。この子を酷い目に合わせた奴はやつつけたのか？」

「…ああ、仲間が塵一つ残さず燃やし尽くしたよ。この子が利用される事はもう無いだろ」

「そうか…。残念だな、俺も一発ぶん殴ってやりたかった」

一つ大きいため息をついた。そして、気を取り直して笑顔になる。「だったら尚更新しい名前が必要だろう。この子が幸せになれるよ。うな、そんな名前が」

そう。これからは幸せにならないと。俺は無い知恵を絞って考えるが…

ダメだ。頭の中身まで強化は出来ないらしい。思いつくのは漫画の中の登場人物の名前みたいな恥ずかしい名前ばかり。まともな人なら失笑しかねない。

「えーと…誰かいいアイデアある人お…」

助けを求めたら、皆が呆れた。仕方ないでしょ、なんも思い浮かばないんだから！

「親なら、責任もって名前をつけてやれ」と、親父。

「私よりも健司さんにつけてもらった方がこの子も喜ぶわ」と、紗英さん。

「私に助けを求めるといふ事は、私を妻として受け入れる事を意味する」と、紗良。アホか。

ああ、もう仕方ねえな！ 後悔すんなよ！？

「よし、今日からお前は『幸太』だ！ 幸せって意味だからなっ！」

どうだ！ そのまんまだろ！ ざまあみる！

しかし、その名前を聞いた魔王…もとい、幸太はキョトンとした後に嬉しそうに言った。

「うん！ こつた！ うん！」

……。

いや、そうじゃないんだ。

「ボク、うんこ！」

違う！ 違うんだ！ そんなつもりじゃないんだ！

「幸太、だからね？ こ・う・た！ うんこじゃないよ？」

「うん！ こうた！ うんこ！」

「違う…」

ヤバいと思ったが、もう遅い。気に入ってしまったようだ。幸太は楽しそうにうんこを連呼する。ガツクリとうなだれた俺を、親父たちはすんごいジト目で見つめていた。

…ま、まあ、何はともあれ。

その日、我が家に新しい家族が増えた。佐藤幸太。元魔王で今は子供。うんこうんこ言うのが玉に瑕だが、それさえ無ければ最高に可愛い自慢の息子だ。家族の協力も得る事が出来たし、正体さえバレなければ平穏無事な生活を送らせてあげられるはずだ。

さし当たって問題があるとすれば…



クリクリ達にどう説明するか、なんだよなあ…

## 第十話 パパは高校生

今でもたまに夢に見る事がある。俺を生んだ母さんがまだ生きていた頃の光景だ。まだ小さかった俺を挟んで、左に親父、右に母さんで川の字で寝ていた。

俺は絵本を読んでもらうのが好きで、寝る前にいつも二人に「絵本を読んで」とせがんでいた。きまって読み始めて五分もしないうちに眠っちゃうんだけどな。まあ、それが俺にとっての家族ってやつ。の原風景なんだ。

いつか家庭を持てたら、今度は俺が子供に絵本を読んでやりたい。そんな事をなんとなく考えていた。だから、こうして幸太と一緒に寝る事になって、俺としては何とも感慨深いものがあつたりするんだよ。もっとも…

「ねー、子供にBしてマズいかなー」

川の片割れが紗良ってのはいただけないけどな！　つーか幸太に何読んで聞かす気だ、教育上好ましくないどころか歪み過ぎじゃねーか！

「ちえー、いけずー」

「いけじゅー」

ああ、幸太が真似するし！　まったく、ウチの子に余計な事吹き込まないでくれませんか。紗良みたいになつたらどうすんだよ、もう。

「兄さん、人が変わりすぎ&失礼すぎ。それにしても、なんで幸太君は私をママって呼んでくれないかなー。ねえ、幸太君。この人は？」

紗良が俺を指差す。

「パパ！」

「じゃあ、私は？」

「しゃらー！」

偉いぞ。本能的に紗良を母親とする事に危機感を抱いたんだろう。将来大物になる…のか。一応魔王だし。

「うー、なんでよう。幸太君のいけずー」

「いけじゅー」

完全に覚えちゃったじゃないか。勘弁してくれ。…でも確かに不思議だな。

「幸太。紗良はママじゃないのか？」

そう言うと、幸太は頷いた。

「しゃら、一緒にママ、探してくえゆの」

その言葉を聞いて、紗良は布団に突っ伏した。なるほどね、最初に会った時にそう言ったのか。なら母親とは認識されないわな。ド

ンマイ、紗良。

「まーいいわ。兄さんの理性破壊して既成事実作る方に専念するか  
ら」

やめなさい。

そんな馬鹿な会話をしていたら、幸太がカクンカクンと頭を揺らして…ああ、眠たいんだな。船を漕ぐ、ってやつか。俺は幸太を抱き寄せるとリモコンで明かりを消す。幸太はすぐに寝息を立て始めた。

そして、紗良は静かにベッドを出る。

「一緒に寝ないのか？」

「うん。流石にシングルに三人は狭いもん。それに…」  
少し間を置いて続けた。

「何だか今日は疲れたから。自分の部屋で寝るわ」

「分かった。…朝の襲撃は勘弁してくれよ？ 俺も疲れたから」

「あはは、分かってるって」

そう言って紗良は部屋を出て行った。なんか…雰囲気変わったなあ。向こうに行って、アイツはアイツなりに苦労したのかもしれない…そんな事を考えながら、目蓋を閉じる。

幸太の穏やかな寝息を首筋に感じながら、俺は意識を沈めて行った。

朝。此方の世界に帰還してから毎日のように紗良の襲撃を受けてきたが、今日はゆっくり出来る。久しぶりに二度寝かましてやろうかと思っっていると…

「どーん！」

ズムッ！

「はぶあっ！？」

腹部に強烈な衝撃が！俺のアラームを発動させずに攻撃するか、やりよるな！？

「…って、幸太か！朝から元気いいな！」

「パパ、おきた！」

ああ、起きるとも。時計を見ると…朝6時か。悲しい事にこの時

間に目覚めるのにも馴れてきてるからな。目覚めはスッキリさ！

「あのね、おなかすいたの。おみず、のみたい」

水？…って、コイツ水で飢えをしのいで来たのか？ 魔族で生命力が強いとはいえ、ちよつと不憫過ぎるだろ。

「今日はもつと栄養になるものを食べるぞ。紗英さんなら、何でも作ってくれるから」

俺は急いで制服に着替え、幸太の手を引いて台所へと向かった。

紗英さんはいつも朝5時半には起きて朝食を作ってくれている。親父や紗良の弁当を作ったりしているからだ。特に紗良は偏食が凄いうえにアレルギーがあるからな。学食で食べたり出来ないんだ。俺？ なんか気恥ずかしくて断ってる。

「あら、おはよう健司さん。幸太君も、おはよう」

「おあよう…！」

「おはようございます。紗英さん、幸太が腹減ってるって。今までろくに食ってなかったみたいだから、胃に優しい物作ってあげられないかな」

「まあ……」

驚いたような顔をする紗英さん。幸太って見た目角が生えてる以外は普通の子供にしか見えないからな。飢えてるなんて分からないだろう。紗英さんは急いで冷蔵庫の中をチエックする。バナナやら牛乳やら蜂蜜やら……ミキサーにかけて、あつという間にシェイクを作った。

「幸太君、どうぞ」

「……？」

コップを受け取ると、クンクン匂いをかぐ。そして恐る恐る口をつけると……

「……！？ んぐつ、んぐつ、んぐつ……」

豪快に飲み始めた。

「幸太、急がなくていいから！ 逃げないから、落ち着いてのめつて！」

「んぐつ、けほつ、けほつ！」

ああもう、言わんこっちゃない！ 俺が背中をさすってやると、幸太はしばらくむせた後に紗英さんの方を向いた。

「もつと！」

「あらあら」

微笑む紗英さん。なんか紗英さんも嬉しそうだ。紗良の小さい頃を思い出したのだろうか。やけにご機嫌で鼻歌歌いながらシェイクの追加を作り始める。そんな紗英さんに、幸太はとんでもない事を言った。

「じゃえ、ママみたい」

ピシッ

何だろうな、この音は。俺のアラームも鳴りだした。イヤだなあ、  
と思いながら後ろを振り返ると案の定紗良と…親父までいた。

「紗英が…紗英がママで健司がパパって、俺は一体どうすればいい  
んだ！ 紗良と結婚しろって事か！」

「母さんズルいし父さんキモい！ 第一私が兄さんと夫婦になるん  
だからね！」

お前ら自分の発言の異常性に気づけ。紗英さんも「複雑な家庭事  
情ねえ」とか言って笑ってんじゃない、崩壊しとるわそんな家庭！

俺たちがギャーギャー騒いでいる中、幸太だけはニコニコしながら  
シエイクのおかわりを飲み干していた。



あー、久しぶりに俺の中に渦巻く負の感情。それは誰しも一度は抱く…というかちょっと前まで毎日抱いていた感情だ。つまるところ、何かというところ。

「学校行きたくない…」

もうね、何度シミュレーションしても、幸太の事を打ち明けると嫌な展開しか思い浮かばないんだよ。朝、クリクリに会ったらなんて説明しよう。

魔王が家に来たよ！　じゃあ一緒に倒しましょう！　バッドエンド…となるのは避けたい所だ。しかしね、魔王本人はともかく、魔界將軍たちは本当に酷かったんだ。それをずっと目の当たりにしてきたファンタジー世界の人間が簡単に割り切って許せるとは到底思えない。鉄丸？　呪いの大元と言われてる魔王を許せるかなあ…

そんな事を考えていると、自然と足は重くなる。サボりたい。けどサボったらクリクリが死ぬほど心配しそうだ。ステラさんあたりと一緒に家まで押しかけて来そうだな。ああ、今日は土曜日でさっさと終わるってのにサボりたくて仕方がない！

…なんてブツブツ言ったら教室についてました。

「おはようございます、健司様！」

「お、おはようクリクリ。今日も綺麗だねアハハハハ」  
しまった。

凄い不自然だった。クリクリも怪訝な顔で俺を見る。

「健司様、大丈夫ですか？　もしや、昨日何かあったんですか!？」  
おおっ、鋭い。

何か言い訳を考えていると、胸ポケットに入れた文庫本の事を思い出した。

「い、いや昨日話してた本がさ。見つかったはいいいけど変なタイトルだね」

「あら、どんな…って、『勘弁して下さい』?」

「ああ。俺も先輩を笑えないかなって。だからさ、クリクリも先輩にはこの本の事は秘密な」

ごまかせただろうか。不安になりながらもクリクリを見ると、クリクリはクスツと笑って「それじゃあ、二人だけの秘密です」と言ってくれた。ああ、なんて良い子なんだ。騙してしまったのが、後ろめたすぎる。

結局俺はクリクリに幸太の事を話す事が出来なかった。

昼になり授業が終わると、運がいいのか悪いのかクリクリは「用事で今日は急いで帰ります。健司様、ごめんなさい！」と深々と頭を下げて先に帰って行った。クラスの何人かは「ふられたな」と言っただけで、別に気にならない。というか早く帰りたかった。俺は「さ、寂しくなんてないんだからねっ！」と言って教室を出る。何人かの人間は笑ってくれるようになっていた。まあ、オタクって事になってるからな。役作りだよ、うん。そういう事にしておいてくれ、反省してるんだから。

流石に身体強化までは使わないが、俺は全力で家路を急いだ。チヤリはその能力の限界を超えて風になる。猛スピードで家についた途端にチェーンが外れペダルが取れてタイヤがパンクした。どんだけ必死だったんだ俺は。

玄関を開けて、まず居間へ行く。勿論幸太の姿を見つける為だ。幸太は…いた！カーテンの裏だ！すごい膨らんでる！

俺はゆっくりと近づくと、某パニック映画の音楽を口ずさむ。ズーンズン、ズーンズン、徐々に早口で口ずさみながら歩いて行くと…

「パー！」

「なにっ!?!」

なんと、テーブルの下から幸太があらわれた! そしてそのまま俺の腰にタックルをかます! なんとという頭脳プレー、もうお前に教える事は何も無い!

俺はそのままカーテンの膨らみに倒れてゆく。一体なんなんだこれは。思わず両手を前に突き出すと、不思議な感触が俺の手を包んだ。

むにゅん…

「あんっ! 健司さん、ダメよ…!」

さ、ささ、紗英さん!?

紗英さんの…

「おっばい!」

「あたりー!」

カーテンの裏に隠れていたのは紗英さんでした。うぬう、やけに膨らみが大きいと思っただら紗英さんでしたか。というか胸掴まれても抵抗ナシとか凄いな。

「隠れん坊してたのよねー」

「ねー!」

そうですか。仲良しでいいね。俺も混ざりたかったよ。

今日は紗良が部活で居ないので、紗英さんと幸太、そして俺の三人で昼食を取った。幸太は胃が収縮しているのか、まだ沢山は食べられない。紗英さんの作ってくれたお好み焼きを、ゆっくりモシヨモシヨと頬張っていた。

「ねえ健司さん。ちょっとお願いがあるんだけどいいかしら」  
俺が自分の分を食べ終えた所で、紗英さんが話しかけてくる。

「幸太くんの服とか、買って来て欲しいの。お金は多めに渡すから、健司さんもついでに服を買って来るといいわ」

「え？…でも、子供の服なら紗英さんの方が…」

そこまで言っつて、気がついた。幸太の素性がバレないようにするのは、紗英さんじゃ難しいかもしれない。何かトラブルがあった時は俺の方が対処出来るだろう。紗英さんだって家事で忙しいから、ここは俺が引き受けた方がいいよな。

「分かった。とりあえず子供用のコーナー行ってみるよ」

「ごめんなさいね、健司さん」

何をおっしゃいますやら。助けてもらってるのはこっちなのに。俺は紗英さんからお金の入った茶封筒を受け取ると、幸太に向かって声をかけた。

「じゃあ、食べ終わったらパパと一緒に外行こうか！」

「うん！」

元氣よく返事をする。

ああ、いいなあ……。なんか、幸せだ。そんな幸せに浸りながら、俺は今自分の言った言葉を反芻する。

パパと一緒に外行こうか！

…俺、自分の事をパパって普通に言ってたな。流されやすいにもほどがある。けど可愛いからいいや、と思ってしまっ俺はきつと重症なんだろうな。そんな気がした。

俺の住んでいるのは日本海に面したとある県の田舎町だ。周りは田んぼだらけ、電車か車を使えば二十分くらいで賑やかな街に出られるという中途半端な田舎。そんな田舎の唯一まともに買い物物出来る場所が、駅前通りのデパートだ。俺は幸太を連れて、バスでここまでやってきた。

ちなみに幸太はニットの帽子で角を隠している。羽は服着れば普通に隠せるが角は無理だからな。牙？ 八重歯だと言えはいい。外国と違い日本じゃチャームポイントらしいからな。

さて、そんな風にデパートへとやってきた俺たちだが、ここは田舎町だ。買い物する場所が限られてくる以上、クラスの奴とも遭遇する確率は高くなる。そんな事を失念しているなんて、俺もだいぶ気が緩んでいたようだ。

「あ、佐藤君？」

デパートの入り口で俺は、誰かに声をかけられた。それは男にしてはやけに澄んだ高い声。ちょっとはずんでるのが微妙に怖かったりする…

「やっぱり佐藤君だ！ 君もお買い物？」

我がクラスの男の娘、轡田だった。

この時、俺には微かにアラームが聞こえていたハズだったんだ。でも、それはまだ小さくて俺は気にもとめていなかった。

後々思い返せば、それは大きなミスだったんだろう。この時引き返せば、少なくとも回避する事は可能だったと思う。

何故なら今回のトラブルの被害者は俺ではなく。この気弱なクラスメート、轡田だったのだから。



## 第十一話 ママは男の娘

轡田と俺は、以前話した通りそれほど仲がよいという訳じゃなかった。単に学校の授業で複数人で作業する時に、声をかけやすい相手の一人というだけだった。だからあの一件以来懐かれてはいるものの、俺は轡田の普段の姿なんて全然知らない。プライベートに関する話なんてあんまりした事は無かった。だから…普段のこいつがまるで女の子みたいな服を着ているなんて、思ってもみなかった。

「お前…なんつー格好してんだ…」

「えっ？ 普通にシャツとジーンズだよ」

男じゃまず履けそうにない凄いスリムなジーンズに、可愛い柄のプリントされてるシャツ。元々の体型からして女の子なこいつには気味が悪いほど似合っていた。この姿は決して普通じゃないと思うそばに居る幸太なんて、男か女か分からないのか混乱しているようだ。固まっている。

「ねえ、ところでこの子は？ 親戚の子供さん？」

「ん？ ああ…なんつーかその」

なんて説明したらいいんだろうな。俺が迷っていると、ふと、幸太が目を輝かせているのに気づく。おや？

「ママ…」

.....。

なんだって？

「ねえ佐藤君。僕としてはどうリアクションしたらいいのかな」

「ママ！ ママッ！」

幸太が轡田に飛びつく。俺はそれを呆然と見ていた。いや、轡田が女にしか見えないのは分かるけどさあ……。紗良はともかく、紗英さん見てもママって呼ばなかったのに轡田見てママって……。

幸太は目に涙さえ溜めて轡田にしがみつく。轡田も困惑しながらも幸太を抱っこしていた。何気に力あるんだな、轡田。

「えーと、訳あって家で預かる事になった子だ。親が居なくて、俺の事をパパって呼んだりしてる」

「そ、そうなんだ。なら仕方ないね」

仕方ないのか。お前優しいんだな……。それとも流されやすいだけか？ ママって呼ばれるのは男として終わってるだろ。

「今日はこの子……幸太の服を買いに来たんだよ。お前は？」

「僕は注文してたCDを受け取りに来たんだ。二階のCD屋だよ」

ふーん…。音楽ねえ。

「ねえ佐藤君。幸太くんだけ、この子の買い物付き合おうか？僕も育児をしてる姉さんの買い物に付き合ったりとかして、多少この子供服売り場に詳しいから」

「え、いいのか？」

これは何という幸運！ 正直言えば子供服を買うのなんて初めてだから、少し戸惑ってたんだ。これは助かる。

「今日は予定ないし…第一、この子が離してくれないよ」

ぎゅうう、としっかり抱きついている幸太。そんなに轡田がいいのか。君の好むママ要素ってやつがパパには分からないよ。

結局、俺は轡田に幸太の買い物を手伝ってもらった事にした。買い物に関しては俺よりも頼りになりそうだ。俺は幸太を抱っこしている轡田の荷物を代わりに持って、まずはCD売り場へと向かう。その際、エスカレーターの鏡張りの壁を見て思ったんだが…

まるつきり、若い夫婦だな。

俺はなんだか複雑な思いをしながら、鏡に映った自分たちの姿を見ていた。

二階でCDを受け取り、子供服売り場へ。そこで俺は轡田の事を見直す事となる。普通は子供って服に関心ないから、どんな服が欲しいかなんて言わない。選ぶのに迷っていると、勝手に走り出した。り暴れるのがお決まりのパターンだ。少なくとも、俺はそうだった。

しかし轡田は幸太と上手くコミュニケーションを取りながら、次々と服をリストアップしてゆく。「これ、好き?」「これは、嫌い?」と、単純な好き嫌いを聞きながら幸太の好みを分析する。そして、ある程度イメージが固まったら店員さんを選んでそれを伝えた。どうやら店員さんは轡田の知り合いらしく、やけにスムーズに話が進んで行く。

「ネタばらしすると実はここ、姉さんの職場なんだ。あの人は姉さんの友達で、よく家に遊びにくるんだよね」

ああ、なるほど。でもそれを差し引いても、こいつの買い物上手な所は凄いと思う。子供の扱いも手慣れてるし、いい母親に…って、イカンイカン。変な事考えちゃった。

結果として、轡田のお陰で幸太の服は問題無く買い揃える事が出来た。予算内で揃えられる物としてはベストな物を買えただろう。俺が礼を言つと、轡田はニコツと笑って一枚のカードを出した。それは…ここのデパートのやつか?

「今回の買い物のポイント、もらっちゃったから。僕も得したから、気にしなくてもいいよ」

お前…。

そんなの、微々たる金額じゃないか。本当に優しいんだな、お前は。不覚にも、ジンと来てしまった。

「なら、せめて飲み物くらい奢らせてくれないか。このままってのも、俺としては気持ち悪いんだ」

「佐藤君って、律儀だねー」

少し苦笑いする轡田。

「でも、そうだね。幸太君も疲れて少し眠いみたいだし」

見ると確かに目蓋が重そうだし、さっきから喋らなくなっていた。慣れない環境ってのもあるんだろうな。俺は轡田から幸太を受け取り抱っこすると、最上階にある喫茶店フロアへと向かった。

喫茶店での小休止の間、俺は初めて轡田とまともに話をした。いつも学校でしているような当たり障りの無い会話ではなく、互いの趣味や好きな食べ物、最近見たテレビなど…普通の友達同士でするような会話を、普通にしていた。

それは多分、本当に久しぶりの事だったんだと思う。

中学で少し苛められた事がある俺は、同じ中学出身の奴がいないこの町の高校へと進学した。新しい場所では標的にならないように、常に警戒しながら生活してきた。だからこんなに素で話したのって、

同級生では初めてかもしれない。

「えー、いいじゃない洋楽。このアルバムは聴きやすいから、入門編として今度聞いてみる？」

「いいよ、俺英語聞くとジンマシン出るから」

「ジンマシンって、響きが英語っぽいよね。ズイン・マツスイーン、とか」

「や、やめろ、ブツブツ出てきた！」

こんな馬鹿なやりとりが無性に楽しい。俺って実は寂しかったのかな。轡田と話していて、そんな風に思った。

さて幸太も充分休んでケーキセットも食い、たいそうご機嫌で喫茶店を出た時。フロアの中央、開けたスペースに人ばかりが出来るのに気づいた。なんだなんだ、と見てみると面白い物客だけでなく地元ローカルではあるがテレビカメラまで来てやがる。

「なあ、これなんだ？ こんな田舎にテレビ局の連中が来るって」

「さあ……。あ、看板あるじゃない。えーと、今話題の手品師がやつ

てきた…」

看板には如何にもローカル臭の漂う文句が。どうやら手品ショーをやっているらしい。

「パパ、見えないの」

人垣の向こうが気になるのか、幸太はピョンピョン飛び跳ねる。俺はすぐに肩車をして、見やすい場所へと移動した。比較的人数の少ない場所から中をのぞき込むと、そこには真っ白い仮面をつけた女性が一人。仮面とは対象的な黒いドレスに身を包み、空中にトランプを飛ばして客を盛り上げていた。

「パパ、すごいよ！ 白いの、ぴゅんぴゅん飛んでる！」

そうか、良かったなあ。今のが卑猥に聞こえるパパは腐ってるよ、うん。

幸太はとてもご機嫌だ。しかし…手品って、確かに凄いけどさ。種も仕掛けもあるから手品なんだよな。こつして飛び回るトランプにも、何か仕掛けがあるはずだ。ようし…

俺は身体強化を試みる。強化するのは、目だ。一度でいいから、手品師のトリックを見破ってみたかったんだよね。こつちで能力を使うのは避けてたけど、目の強化ならバレないだろ。

キュイイーン…と、俺の視力が強化されて行く。覚悟しろ、手品師！ 俺の目にはお前のトリックなど通用しない！ そう意気込んで睨みつけたが…

あれ？

本当に、種も仕掛けも無いぞ？ そんなハズは…

『ハイ、空飛ぶトランプでしたー！』

ワアアアアア、と沸く観客。見破る事無く終わっちゃったなあ。  
あるえ？

『では次にバラのテレポーションを行います！』

仮面の女は、インカムでそう高らかに宣言をする。手には一本のバラ。うーむ、こうなったら次こそは。俺はクルクルと手元でバラを弄ぶ仮面の女を凝視した。

その時。

俺のアラームが、危険を知らせる！

強化した俺の目が、女の手元からバラの枝が飛び出すのをとらえる。それは尋常でない速さで、ある一点を目掛けて発射された。俺は全力で反応すると、それを空中で受け止める。

『ハイ！ バラは可愛いお子さんをお連れのカップルの手元へと移動しましたーっ！』



ワアアアアア!

フロアがまたもや歓声に包まれる。幸太もいきなりバラがあらわれて驚いたようだ。周囲の目は俺の突き上げた手に握られたバラの花へと集中する。轡田も、声を上げて驚いて…

俺の顔を見て、固まった。

「さ、佐藤君？ どうしたの、怖い顔をして…」

怖い顔？ そんな顔してるか？

そりゃそうだろうな、少なくとも笑う事は無いだろ。俺は確実に怒ってんだから。このバラ、俺が止めなかったらどこに飛んでたと思っ？

幸太の顔面だぜ。

あのクソアマ、よくも俺に喧嘩売ってくれたな。後悔させてやる。

「バラ、お返ししますね」

俺はそう言うと、バラを持っていた手を微かに動かす。その途端、手元にあったバラは一瞬で消えた。そして…

ガチッ!

女のいる方向で、奇妙な音がする。そこには、俺が放ったバラを口にくわえた女が立っていた。よく噛んで止められたもんだ、ノドまで貫くつもりだったんだけどな。

『あ、ありがとうございますー！ 皆さん、お若いカップルに大きな拍手をー！』

観客は恐らく今日一番盛り上がったんだろうな。戸惑う轡田とキヤッキヤと喜ぶ幸太、それを撮影するテレビカメラ。レポーターらしき人が近づいてきて、話しかけてくる。くそ、面倒くせえなあ…そんな気分じゃないのに。

レポーターはローカルタレントで、最後の俺の攻撃も手品と思い、色々話しかけてくる。俺は適当に「手品の練習してるんです」と言っただけだったが、次にレポーターがターゲットにしたのは幸太だった。

「ボク、お名前は？」

チクシヨウ、鬱陶しいな。俺が強引に切り上げようとすると、幸太はとんでも無い事を言った。

「うんこー！」

「…えっ!?!」

「ボク、うんこー！」

凄い放送事故だな、おい！

困惑するレポーター、爆笑する観客。俺は「す、すみません、トイレ行きたいみたいなんでこれで失礼します！」と言って幸太を肩車したまま逃げ出した。勿論、轡田も一緒だ。

ナイス、幸太。今日は帰ったら沢山遊んでやるからな。俺は内心でガッツポーズを取りながらエスカレーターを下りて行くのだった。

デパートの一階まで下りてきた。

俺はこのままデパートを出てさっさと帰るという選択肢を選ぼうと最初は思っていたのだが、目の端に厄介な影をとらえてそれを断念する。轡田に幸太を預けて、俺はトイレへと向かった。

「あれ、トイレに行くのは幸太くんじゃないの？」

「いや、単なる口癖なんだ。本当に行きたいのは俺だったり」

そんな軽口を叩いて、トイレへと入る。誰も居ないトイレの洗面台、大きな鏡に向かって俺はドスのきいた声で話しかけた。

「いるんだろ、ミラージユ。俺の機嫌がこれ以上悪くならないうち

に出てこい」

端から見たら一人で鏡に話しかけてるおかしな人だろう。向こうも無視し続けて誤魔化すつもりなんだろうが、そうは行くか。

俺は右手の指を強化する。強化する場所が狭ければ狭いほど、強化の威力は増して行く。

「今なら、デコピンの風圧だけでそこら中の鏡を粉々に出来るぞ」

「わ、分かった！ 分かったから右手を下ろしてちょうだい！」

ふん、最初から大人しく出てこいクソが。

鏡の中に先ほどの仮面の女が現れる。

気取った風な仕草で仮面を取ると、そこには厚化粧の女の顔があった。

「久しぶりだなミラージュ。相変わらずムカつく演出してくれるじゃないか」

「そんなにカリカリしちゃダメよ、ケンジ様あ。それに私の行動は悪い事じゃないハズだけとお？」

あんだとクソアマ。子供狙つといて悪くないだあ？ 俺が殺気をぶつけると、ミラージュは楽しそうに笑った。

「だって、あれは魔王じゃない。私たちが殺すべき存在よ？ アナタは魔王を殺す為に勇者になったんだし、それを見届けるのが王国魔導士団の特別顧問たる私の使命ですからねえ。仕留め損なったな

ら、トドメを刺すのは私の仕事かなあ、って』

ギリギリ、と奥歯を噛み締める俺。コイツは変わんねえな。最初から最後まで俺を見下していた。こつちの世界に来た理由は知らねえが、幸太を狙うのなら容赦しねえ。

「幸太は俺の家族だ。魔王だとか、関係ない。こつちの世界にはこつちの世界のルールがある。それを踏み越えて好き勝手やるなら、俺は勇者の称号を捨てて魔王を名乗ってやるよ。お前を含むクソ共を叩き潰してやる」

『あはははは、アナタって単純ねえ……』

何とでも言え。頭のいいお前と比べたら俺は単純な馬鹿だろうさ。だが、やると決めたらとことんやるぞ。

全身全霊、有らん限りの念を込めてミラージユを睨みつける。どれくらい睨みつけていただろうか、しばらくするとミラージユは大きくため息をついた。

『ごめんなさい』

「…は？」

なんだ、いきなり。

『ごめんなさいって言ったのよ！ 本気でアナタに逆らうわけ無いでしょ。あのバラだってあの子の帽子にくつつけるだけだったの。』

アナタは私を嫌ってたみたいだけど、少なくとも私はアナタを仲間だと思ってたのに……』

あれえ？ デレた？

『まったく何よ、勝手に帰るとか言っただけを悲しませて、いざ追いかけたら魔王と幸せそうに暮らしてました、とか。ちよっとは私たちの気持ちとか考えて欲しいわね。嫉妬の一つくらいするわよ、もう』

もう、とか言われても。おかしいなあ…コイツに好かれた記憶は全く無いんだが。

「幸太を狙わないなら嫌わないよ。俺だって、かつての仲間と反発したり嫌ったりなんて嫌だからな」

『本当に？ さっきの事、許してくれる？』

「ああ。俺もキツク言い過ぎた。悪かったよ」

そう言つと、ミラージュはへなへなと鏡の中でへたり込む。よく見ると全身汗まみれだ。もしかしなくても、俺の殺気にあてられてしまったんだらう。ミラージュは鏡の中の洗面台にもたれかかっていた。

「それにしても、一体さっきのパフォーマンスは何だったんだ？

お前、こっちで何してんだよ」

『え？ 何って手品師。私こっちで暮らそうと思ってるのよ。魔法使いの能力も手品って事にすれば誤魔化せるでしょ。…って、ヤバッ！』

なんだ？ 鏡の中で慌てだしたぞ？

『そろそろ次の営業に行かなきゃ！ 時間ないから手短に言うけど、魔王の魔力を甘く見ないでね！ あの子、現時点でとんでもない力を持つてるから！ 何かあったら、鏡を通して話しかけて！ んじやっ！』

「お、おい！ ミラージュ!？」

俺が呼び止めるもミラージュは問答無用で鏡の中から消えて行った。何なんだ一体。相変わらず自分のペースでしか話をしないやつだな。仕方ない、いつまでも幸太たちを待たせるわけにも行かないし、さっさとここを出るか。そうつぶやきながら俺はトイレを後にした。

トイレを出ると、木製のベンチの上で轡田が幸太に襲われていた。

「い、痛ッ！ 佐藤君、助けて！」

「はむはむはむ…」

あんまり長くトイレに入っていたから、待ちくたびれて眠ったんだろう。轡田に抱っこされた幸太は、寝ぼけながら顔を轡田の胸元にうずめていた。これは…

「噛んでる！ シャツの上からおっぱい噛んじゃってるの！」

「男が自分の胸をおっぱいとか言うな、おぞましい！ そこは堂々と乳首と言え。もしくは別名『乳首山』と呼ばれる安達太良山を引用して、俺の安達太良山が口撃にさらされ噴火寸前だぜ、でも可だ」

「どうでもいいよ、そんな豆知識！ いたたたたたっ！」

冷たい事言うなよ。へこむだろ？ 俺は仕方なく幸太のそばへ行くと、脇をくすぐった。

「うははははええのんかここがええのんかーっ！」

「きゃははははははっ！」

口を開けて大笑いする幸太。その隙に轡田から離すと、轡田は急いでベンチから立ち上がった。胸元は…ああ、よだれで凄い事に。

「悪い。クリーニング代だそうか」

「うっん、そこまでしなくていいよ。子供のやった事だから」

轡田はそう言って手を振った。本当にコイツはいいやつだな。これでホモっぱい所が無かったら最高だったんだが。

デパートを出ると、当たりの建物は夕焼けのオレンジに染まり始



めていた。俺は轡田に礼を言って別れる。幸太は名残惜しそうに「ママ！」と言っていたが、轡田が「また今度遊ぼうね」と言うと大人しく頷いた。何だか本当の母子みたいな雰囲気であんなに複雑だったりする。

轡田と別れて家に帰り、買ってきた服と幸太を紗英さんに預けると、俺は居間のソファにぶっ倒れた。疲れた…こんなに疲れたのって久しぶり…でもないか。最近は疲れっぱなしだ。今日はまた変な奴とも再会したし、俺の日常がどんどん不思議な事になっていくてる気がするなあ。そんな事を考えながらまぶたを閉じる。

…おかしいなあ。

未だに、アラームが鳴ってやがる。微かな音だから、多分直接的な被害は無いと思うんだが。気になる…。

その時、俺の携帯に着信が。かけてきた奴は、轡田だった。あれ？　なんか言い忘れてた事でもあったか？　不思議に思っただけでみると、スピーカーの向こうから轡田の切羽詰まった声が聞こえてきた。

『ど、ど、どうしよう佐藤君！おっばい、おっばい！』

「はあ？　なんだ、今どっかのチャンネルでポロリでもあったか？　民放か？」

『違うよ、僕のおっばいが！』

「…お前のじゃ興味ないな」

『そうじゃなくて！ おっぱいが出てきちゃったんだ！』

どういう事だよ。胸を出してストリップとかしてんのか？ そういう趣味は一人で楽しんで欲しいものだ、と俺が言うとスピーカーの向こうでブチっという音が聞こえた気がした。次にすう〜と息を吸う音が聞こえ…

『だから、母乳が出てきちゃったんだって言ってるんだよ！』

…嘘だろ？

俺は余りの衝撃に頭が真っ白になった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7314x/>

---

俺の日常が不思議な事に

2011年10月26日11時41分発行